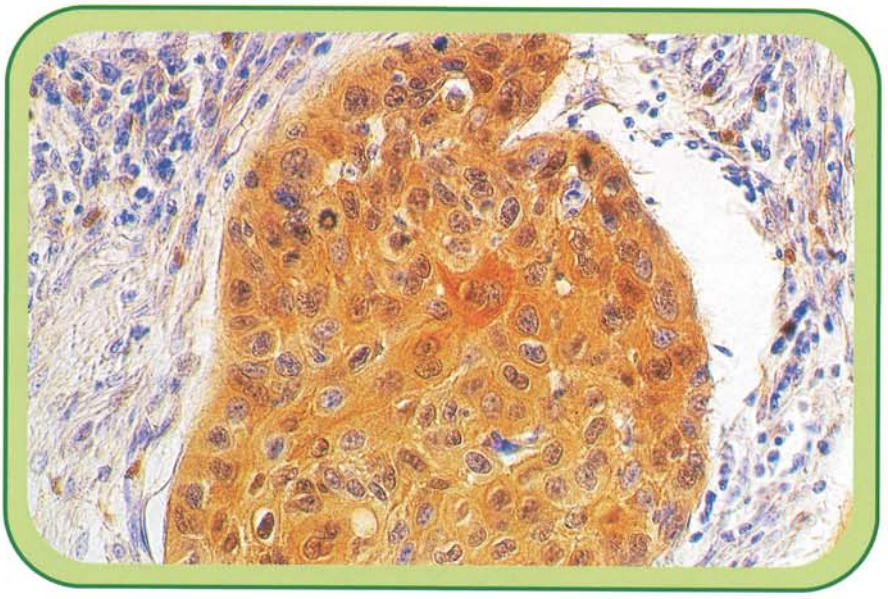
第13号

# さくらじま

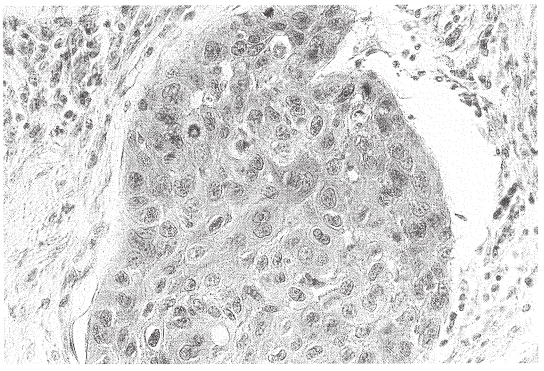
1999



鹿児島大学医学部　耳鼻咽喉科学教室

同門会誌

〔表紙写真の説明〕



チミジンホスホリラーゼによる免疫染色

チミジンホスホリラーゼは血管新生因子であり頭頸部扁平上皮癌において腫瘍細胞内に高発現していた。さらに腫瘍細胞増殖との関連も認められ，血管新生以外の作用を持つことが示唆されている。（*Cancer* 1999;85:960-9 掲載　福岩達哉）

# 目　　次

Ⅰ．巻 頭 言 …… 1

Ⅱ．同 門 会 …… 3

Ⅲ．教室来訪者 …… 5

Ⅳ．教室行事 …… 6

1．共催の講演会

2．桜島フォーラム

Ⅴ．同門会報告 …… 8

Ⅵ．地域医療報告 …… 10

1．巡回診療

2．身体障害者巡回相談

3．学校保健（統計報告）

Ⅶ．特殊外来通信 …… 15

1．アレルギー外来

2．中耳炎外来

3．副鼻腔炎外来

4．頭頸部腫瘍外来

Ⅷ．病理集計 …… 20

Ⅸ．各省庁諸研究 …… 21

Ⅹ．業　　績 …… 22

1．原　　著

2．総　　説

3．著　　書

4．そ の 他

5．国内学会発表

6．国際学会発表

XI．医局通信 …… 28

1．新入医局員紹介

2．海外留学帰国報告

3．学会報告

①第48回日本アレルギー学会

②第11回日本口腔咽頭科学会

③第99回日本耳鼻咽喉科学会総会

④第60回耳鼻咽喉科臨床学会

⑤第 8 回日本耳科学会総会

⑥第37回日本鼻科学会

第34回鼻科学基礎問題研究会

⑦第 8 回日本頭頸部外科学会

⑧Fifth International Academic Conference on Immunobiology in Otology, Rhinology and Laryngology

⑨The 1998 Seven Departments Joint Meeting of Otolaryngology

4．関連病院便り

XII．関連病院住所と診療日案内 …… 57

XIII．同門会及び教室員名簿 …… 61

編集後記

# Ⅰ．巻　頭　言

黒　野　祐　一

鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室を主宰して瞬く間に一年が過ぎました。慌ただしい毎日で，短い足を思いきり伸ばしてようやく地に着いているような日々の連続でしたが，先生方の御支援によって期待以上のスタートをきることができたと感謝致しております。

教室の新たな出発にはまずハード面から整えることが必要と考え，外来，病棟そして研究室の改装を企画しました。プライバシーの保護，インフォームドコンセントの重要性が叫ばれる今日，附属病院における我々の耳鼻咽喉科診療は必ずしもこれに十分答えているとは言えません。そこで，外来の各ユニットを仕切り，すべてのユニットにCCDカメラ装置を装備し，さらにカウンセリングルームを設けました。また，病棟には耳科および頭頚部外科処置のためCCDカメラを備えた手術用顕微鏡と処置用ベッドを設置し，内視鏡とともにモニターで局所所見を供覧できるようにしました。少し手狭ではありますが，学生ならびに研修医の教育，実習，そして患者さんへの病状の説明等に大いに役立つと考えています。

研究室の改装はほぼ終了し，免疫化学・分子生物学実験室としてすでに稼働しています。教室の新しいテーマである「上気道の免疫・アレルギー」に多くの教室員が興味を示し，毎日夜遅くまで研究をするようになったことはこのうえない喜びであり，その成果を楽しみにしています。医局受付は教室の窓口らしさを強調するために，少しモダンなオフィス風にしてみました。医局そして教授室も討論の場として活用し易いようアレンジしました。老朽化した建物の中で，また予算も限られていることから，物が多少変わっただけと思われるかもしれませんが，教室の新たな理念を少しでも感じとって頂ければ幸いです。

教室の活性化には若いエネルギーが不可欠です。幸い昨年は非常に意欲的な３人の大学院生と研修医が入局し，今年も２人入局の予定です。こうした若い教室員をいかに育てるかが教室の発展につながり，またそれが自分の責務であると考え，その一つの手段として，教室の医員・研修医とともに毎週月曜日に20～30分間程度，教授室で英文の耳鼻咽喉科教科書を教材にして勉強会を行っています。これが単なる知識の伝授や学習で

なく，討論を重ねる中で私が教室員を理解し，かつ教室員が私を知る場となることを祈っています。しかし，もっとも重要なことは，長である私が学問を高め自らの人間性を磨くことであり，教育の難しさとともに認識を新たにしている次第です。

私事ですが，昨年末に念願の新居を新築しました。桜島を正面に望める場所にあり，毎日その勇姿に励まされています。大分でも豊後富士と呼ばれる由布山が間近に見える場所に住まいを構えていたのですが，噴煙を上げる桜島には，「静」なる穏やかな由布山とは対照的に「動」なる活気を感じます。私どもの新しい教室も，まだかすかではありますが「動」なる鼓動がようやく聞こえはじめたと感じるこの頃です。

# Ⅱ. 同　門　会

## 新春の日記帖から

理事　吉田重弘

毎年正月は，アッと云う間に過ぎる様に思われるが，本年はその感が特に強かった。

１月１日。昨年の収入がかなりダウンしていたので，今年は頑張ってほしいと，神様のお告げ？だったのだろうか，滅多にない元日の当番医が回って来た。近年長男及び次男ファミリーと一緒に，午前10時頃，正月のお屠蘇を戴くのであるが，当番医なので，昼の時間に変更した。元日の事だし，普通当番より患者さんは少ないだろうと考えていたが，結果は予想外であった。この日は，副院長である長男の診療がすべてであったので，私は楽をさせて貰った。

１月２日。小学５年生の孫の質問「初夢は何日なの」。急いで事典をひもとく，それによると，中世では節分とされていたが，その後正月のはじめ，元旦の夜と云うのがあり，あとでは，２日が諸事の仕事始めにあたるところから，２日の夜と云う例が多いとあった。午後は皆で，荒崎の鶴見物に行く。今年も約１万羽が，シベリヤから渡来していた。次いで，八幡様に参拝したが，そこには，日本一と称する５トンの鈴が，今年より奉納されており，そのいわれはなんだろうと考える。

１月４日。仕事はじめ。昨年は２月から３月にかけて流感が猛威をふるったが，今年は既に兆しを感知する。

１月６日。75歳を過ぎても，全く健康と思われていたＳ先生が昨朝，診療開始直後に倒れられ，市立病院に運ばれたが息を引き取られてしまった。あらためて世の無情を痛感し，心からご冥福を祈る。

１月８日。三種混合の予防接種のため中央公民館に行く。北風が強く寒さも厳しかったので，参加者は少ないと予想していたが，母親達の関心は意外に高かった。

１月９日。朝，流感の患者さんがふえて来る。私も鼻水がなかなか止まらないし，少しせきも出て来た。その上北風も強くなり会合に行けるかな，と不安感もよぎったが，JR に乗る。鹿大耳鼻咽喉科学教室同門会は，城山観光ホテルにて，午後４時から開かれ，役員会，総会，続いて講演会があった。黒野教授次に，山梨医大の岡本教授の詳細

な研究の説明を興味深く聞いて，近い将来，耳鼻咽喉科医が，粘膜免疫の分野で，キャスチングボートを握るに違いないとの期待感をふくらませたのであった。

１月10日。午前７時。ホテルの窓から見る桜島は，頂上付近から雪化粧し，荘厳そのものであった。今朝の新聞によると山は昨日，この冬初めての冠雪であり，北よりの強い季節風は，本日まで続くと報じており，蒼い素晴らしい写真が掲載されていた。

雪を眺めながら，約20年前の光景が，脳裏にうかんで来た。昭和51年６月中旬，ニューオリンズでの，或国際大会に出席の途中，シアトル空港に立寄る事になった。あらかじめ連絡はしていたのだが，タラップを降りて行く我々夫婦をブロンドの女子高校生が，家族４人で，身を乗り出す様にして，手を振りながら迎えてくれた。この日は，我々にとって，アメリカ大陸第一歩の感激の一瞬であり，日米交換学生として，帰国したばかりの18歳の彼女は，ホストファミリーであった我々夫婦に対して，綺麗な日本語で，お父さん，お母さん，ようこそと喜んでくれた。面会時間の限られたなかで，空港周囲の山の雪景色は，蒼く美しく，印象深いものになっている。

１月13日。朝Ｔさんから電話がある。約45年前，鹿大病院において，私はＴさんの主治医であった。その後お互，住所の変更が度々あったので，全く思い出す事はなかった。ふとした事から，最近電話による付合が始まっている。恐らく会っても，顔はわからないと思うのだが，この日は，彼女の夫の眼病についての，アドバイスを求められた。縁とは不思議なものである。

１月15日。午前10時，野坂先生を訪問。昨年御病気がちであると聞いており，御無沙汰していたので，鹿大同門会及び照鴨会（医専一期生会）の報告をかねて，お会いした。一昨年米寿を越えられた先生は，少し腰が曲がっておられたが，お元気であったので，安心する事が出来た。

同日正午。熊本ホテルキャッスルでの，水俣市立病院ＯＢ会に出席，毎年行われるこの会合も，既に30年を越えた。病院長の病院の現況及び医療情勢のキビシサの説明を聞く。

以上正月15日までの，予期せぬ事柄，出合いの不思議さについてのべたが，真に多様な新春であった。

## Ⅲ. 教室来訪者（平成10年１月～12月）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 7 | 月 | 大分医科大学 | 茂木五郎 |
| 9 | 月 | 岡山大学耳鼻咽喉科 | 増田　游 |
| 9 | 月 | 宮崎医科大学耳鼻咽喉科 | 小宗静男 |
| 12 | 月 | 熊本大学耳鼻咽喉科 | 湯本英二 |

# Ⅳ. 教 室 行 事

## 1．共催の講演会

1．日耳鼻鹿児島県地方部会臨時総会

第３回南九州上気道感染症臨床懇話会（１月10日）

特別講演：中耳炎とサイトカイン

黒野祐一先生（鹿児島大学耳鼻咽喉科教授）

2．第５回鹿児島アレルギー懇話会（鹿児島耳鼻咽喉科臨床会第86回例会）（２月12日）

講演Ⅰ：アレルギー性鼻炎と関連疾患

茂木五郎先生（大分医科大学副学長）

講演Ⅱ：環境大気汚染とアレルギー疾患

常俊義三先生（宮崎医科大学公衆衛生学教授）

スポンサードセッション

：気管支喘息治療－最近の話題

足立　満先生（昭和大学第一内科教授）

3．第87回例会（３月30日）

特別講演：喉頭癌のラリンゴマイクロサージェリー

Haskins K. Kashima 先生

（米国ジョーンズ・ホプキンス大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科教授）

4．第88回例会（４月30日）

特別講演：最近の慢性中耳炎の治療

阪上雅史先生（兵庫医科大学耳鼻咽喉科教授）

5．第23回日耳鼻鹿児島県地方部会総会並びに第78回学術講演会（６月21日）

特別講演：花粉症の外因及びその周辺疾患

竹中　洋先生（大阪医科大学耳鼻咽喉科教授）

6．第79回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（９月24日）

特別講演：外リンパ瘻の診断と治療

小宗静男先生（宮崎医科大学耳鼻咽喉科教授）

7．第80回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（11月26日）

特別講演：気管壁再建－特に甲状腺癌による合併切除の場合－

村上　泰先生（京都府立医科大学耳鼻咽喉科教授）

## 2．第１回 「耳鼻咽喉科　桜島フォーラム」

私どもは，大学病院に，開業の先生方や様々な施設から，貴重な症例を御紹介頂いています。こうした先生方から私どもの施設へ御紹介頂いた症例をまとめ，また特に興味深い症例を呈示し，先生方と討論することによって，実地医家の先生方と大学病院の連携をさらに深めてゆきたいと考え，また，従来の研究会，学会では，一方的な発表となってしまいがちですので，双方向性の意見交換の場として，また，大学病院における現在の医療のあり方について望まれることなど，先生方の御意見を伺う機会を持ちたいとの黒野教授の発案で計画しました。プログラムは，

### 第１回 「耳鼻咽喉科　桜島フォーラム」プログラム

平成10年12月17日㈭

19：00 ～ 20：30

鹿児島大学医学部　鶴陵会館中ホール

Ⅰ．開催の挨拶　　黒野祐一　教授

Ⅱ．症例検討

| | Presenter |
|---|---|
| １．大量の鼻出血症例をどうみるか？ | 西元謙吾 |
| ２．中耳の白色病変は何か？ | 宮之原郁代 |
| ３．咽頭痛を訴える高齢者の診断と治療 | 平瀬博之 |
| ４．小児高度難聴の鑑別診断 | 河野もと子 |

Ⅲ．話題提供

～代表的疾患に対する大学病院における対応について～

| | |
|---|---|
| １．「上気道狭窄病変の顎顔面形態に及ぼす影響」 | 西園浩文 |
| ２．「滲出性中耳炎の治療と最近の話題」 | 牛飼雅人 |

でした。

当日は，開業の先生方や勤務医の先生方20名近く参加いただき，私共教室員といろいろディスカッションすることができました。会終了後のアンケートでも概ね好評であったようです。今後も，多くの方が参加できる日程をくんで更に発展する会としていく予定です。

（文責：松崎　勉）

# V. 同門会報告

## 平成10年度　鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室同門会

平成11年１月９日(土)に城山観光ホテルで，まず午後４時30分より鶴亀の間で役員会が開かれ，次に午後５時15分より錦江の間で総会が66名の参加で開かれました。その後，記念撮影が行われ，同日開催された第４回南九州上気道感染症臨床懇話会へと移りました。

今回の同門会では，「大山　勝教授退官記念事業」の財務最終決算，及び一般会計に関する報告内容が承認されました。また，今後の同門会活動をどのように実のあるものにしていくか問題提起がなされ，この「さくらじま」を本号より，従来の「教室誌」から「同門会誌」として刊行を継続することが決まりました。同門会誌としての紙面作りや名簿の整備に注意を払っていく必要があると思います。また，県外の同門の先生方に様々なスタイルで御参加いただけるような機会が提供でき，「地方部会」とはまた少し異なった味が出せたらと思います。会員諸氏の御協力を切に願うものです。

規約上，同門会役員の任期は３年で，今回は改選の時期に当たりますが，諸事情により曲田公光先生が役員を辞任された以外は全員残留で特に補充も行われず引き続き役員会を構成することになりました。

今回改選され，発足した新役員会は以下のごとくです。

名誉会長；野坂保次，久保隆一，大山　勝
会　　長；黒野祐一
理　　事；吉田重弘，江川俊治，大野政一，勝田兼司，貴島徳明，昇　卓夫，
　　嘉川須美二，山本　誠，小幡悦朗，大堀八洲一，内薗明裕
監　　事；鶴丸耀久，上村達郎
幹　　事；花牟礼豊，上野員義，松根彰志

（敬称略）

今後，同門会規約を「さくらじま」の巻末に毎号継続して掲載することといたします。

（文責：松根彰志）

鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室　同　門　会　総　会
平成11年１月９日　於：城山観光ホテル

# Ⅵ. 地域医療報告

## 1．巡回診療（県医務課）

下 甑 村（６月17日～６月19日）

十 島 村（10月９日～10月13日）

上 甑 村（10月21日～10月23日）

十 島 村（11月10日～11月15日）

南種子町（12月３日～12月４日）

## 2．身体障害者巡回診療

２月　串良町，金峰町

３月　祁答院町

４月　開聞町，東串良町

５月　野田町，溝辺町，十島村

６月　末吉町，知覧町，串木野市

７月　（上甑村・里村），（徳之島町・天城町・伊仙町）

８月　与論町，栗野町，吹上町

９月　名瀬市，鶴田町，喜入町

10月　志布志町，鹿屋市，（和泊町・知名町）

11月　川内市，大浦町，牧園町

12月　三島村，入来町

## 3．学校保健（統計報告）

高木　　実・森園　健介

平成10年度の鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科教室が担当した鹿児島県下の耳鼻咽喉科学校検診（離島検診を除く）は平成10年４月から７月にかけて行われた。その検診結果を集計し，男女別，地域別，学年別等で解析した。

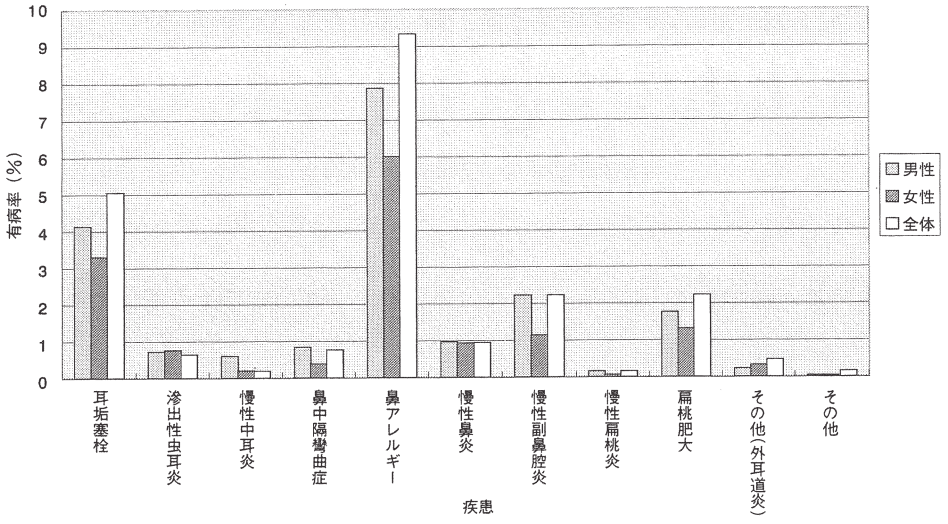
### ＜対象と方法＞

本年度に実施した地域は鹿児島市，垂水市，末吉町，財部町，頴娃町の５市町で，受診者総数は6,669人であった。離島は分析には加えなかった。検診対象者は小学生から大学生にまで及ぶが，例年と同様に小学校，中学校とも受診する学年が制限されているケースが多く，学年別の受診者数にはばらつきがみとめられた。

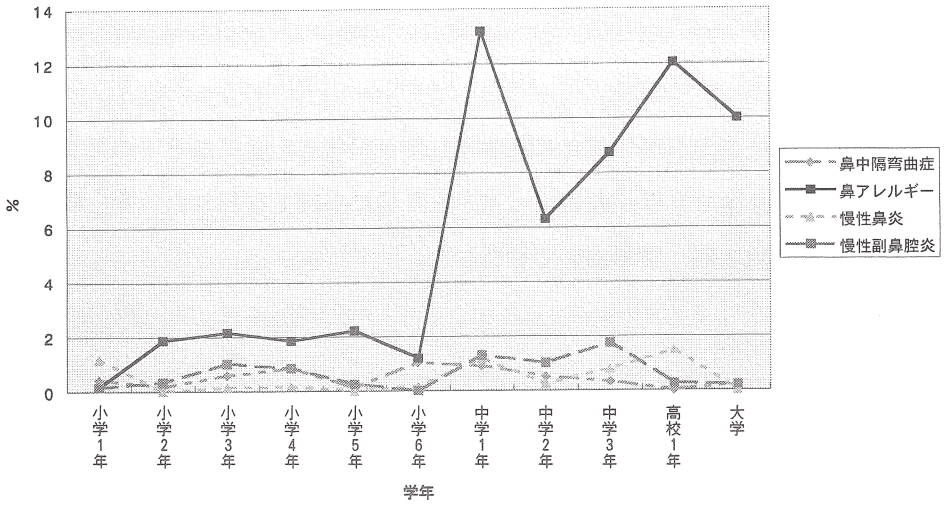
検診の方法及び対象疾患については例年と同様である。

### ＜結　　果＞

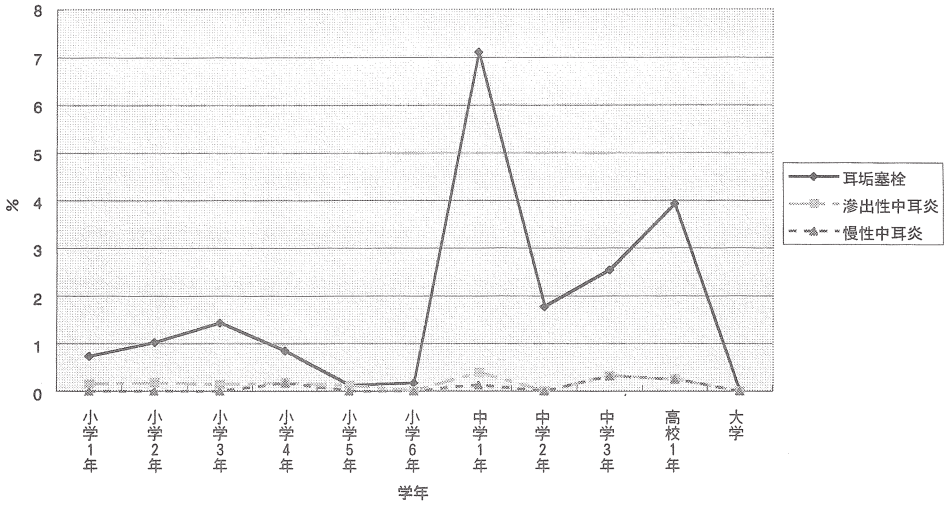
個々の疾患における全受診者の有病率及び男女別の有病率をみると（図１），いずれも例年と同様に鼻アレルギーが圧倒的に多い。次に耳垢栓塞，慢性副鼻腔炎，扁桃肥大の順であった。例年と同様，全体的に女性より男性の方が有病率が高い傾向にあり，慢




全体及び男女別有病率（図１）



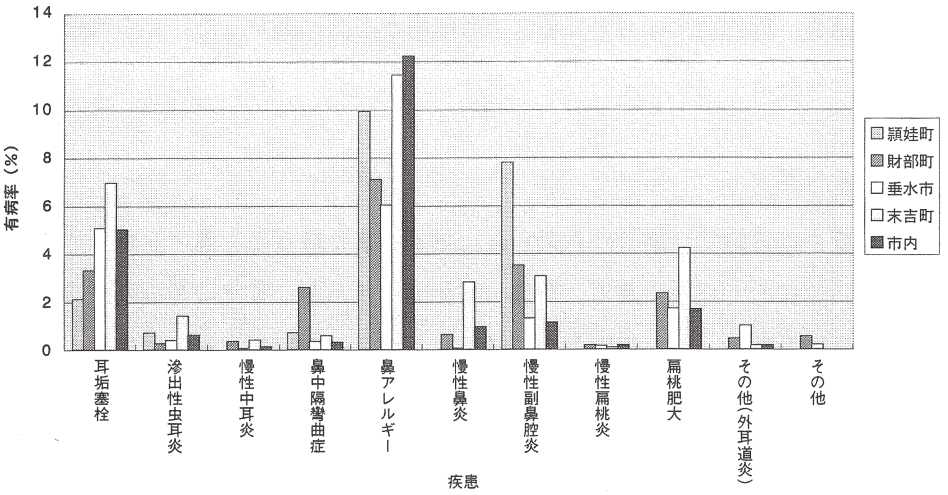

学年別有病率（鼻疾患）（図２）



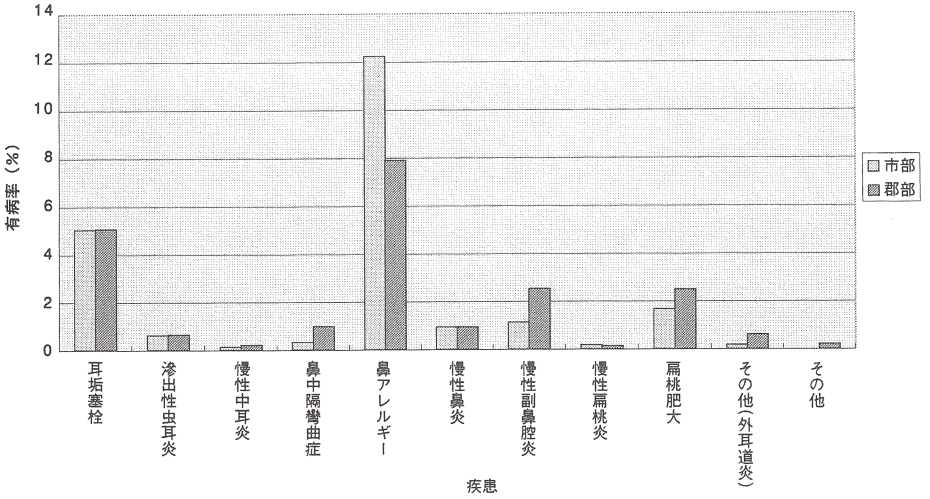

学年別有病率（耳疾患）（図３）

性副鼻腔炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギーにおいては有意に女性より男性の有病率が高かった。

図２と図３は鼻疾患及び耳疾患について学年別の推移を比較したものである。鼻疾患（図２）では鼻アレルギーにおいては全般的に高い有病率を示し，特に中学生以上で高い有病率を示した。耳疾患（図３）では年齢による大きな変化がみられず，いずれの年齢においても有病率が１％以下であった。しかし耳垢栓塞は，中学生から高校生にかけ




地域別有病率（図４）




市部・郡部別有病率（図５）

て有病率の増加を示した。図４は，それぞれの疾患における地域別の有病率を比較したものである。各疾患とも地域ごとの有病率の差が大きいが，もっとも有病率の高い地域を挙げると，滲出性中耳炎は末吉町，鼻アレルギーは鹿児島市，慢性鼻炎は末吉町，慢性副鼻腔炎は頴娃町であった。ちなみに他の疾患では，耳垢栓塞が末吉町，慢性中耳炎は末吉町，鼻中隔彎曲症は財部町，慢性扁桃炎は財部町であった。

また，地域を市部（鹿児島市，垂水市）と郡部（頴娃町，財部町，末吉町）に分けて

比較検討すると（図５），鼻アレルギーは市部で有意に多く，鼻中隔弯曲症，慢性副鼻腔炎，外耳道炎，扁桃肥大において郡部の有病率が有意に高かった。その他の疾患では有意な差は見られなかった。

## ＜考　　察＞

平成10年度の学校検診の集計から得られた結果をまとめると，鼻アレルギーの有病率が他の疾患に比較して格段に高く，市部・郡部別では市部に有意に有病率が高かった。

第２に慢性副鼻腔炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギーにおいては有意に女性より男性の有病率が高かった。例年と同様に女性に有意な有病率を示す疾患は認めなかった。

第３に有病率の年齢的変化で鼻アレルギーは年齢とともに増加傾向を示し，耳垢栓塞は中学生から高校生で増加傾向を示すが，その後減少傾向を示した。以上のような結果であるが，我々は今後も各疾患における有病率の推移を観察していく必要があると思われる。

# Ⅶ. 特殊外来通信

## 1．アレルギー外来

アレルギー外来（再来）は，黒野教授の提案により1997年末にスタートし，毎週月曜日の午後にやっています。新たにこのアレルギー外来を開設した目的は，1）アレルギー検査を症例を集めて効率的に行う，2）当科において確実にアレルギー性鼻炎の患者をフォローし，大学として新しい治療法や新薬の臨床試験のトライアルを行うとき理解の得られやすい環境をつくる，3）現在，ふたたび脚光を浴びつつあるアレルゲン特異的免疫療法（特異的減感作療法）を，その進歩を取り入れながら，地域の先頭に立ってすすめていく，などです。

当科でのアレルギー検査では，皮内テスト８種，鼻汁中好酸球検査，鼻誘発テスト（市販のハウスダスト・ブタクサのディスクの他に，スクラッチエキスを用いて５種可能），末梢血中好酸球数，MAST による吸入系抗原16種に対する特異的 IgE 値の検索を行っています。

現在までのアレルギー外来の患者数は，１日あたり数人から十数人で，平均６人程度とまだあまり多くありません。継続してフォローしている患者数は18人程度です。鹿大病院の地理的不便さや，診療時間の問題等から当科でのフォローを希望されない場合も多く，検査をした後近くの耳鼻咽喉科へご紹介する例も多くなっていますが，大学ならではの特徴を生かした診療を行い，患者数を増やしていきたいと考えています。

特異的減感作療法により治療中の症例は当鹿児島県では現在かなり減少しており，当科でも現在は３人のみです。しかし，特異的減感作療法は唯一の原因特異的な治療法であり，症例によっては完治する場合もあり，もっと行われるべき治療と考えられます。さらに，最近の免疫学の進歩により特異的減感作療法がどのような機序で働くかが少しずつわかってきた一方，アレルゲンペプチドを用いた免疫療法，スギ花粉症に対するプルラン結合スギアレルゲンを用いた免疫療法，DNA ワクチン療法などの，より有効で安全な治療用アレルゲンの開発が進んできており，一部は臨床試験の段階まで来ています。通常の外来で行う減感作療法のスケジュール上の問題点を解決すべく考案された，急速減感作療法も気管支喘息患者に対してだけでなく，アレルギー性鼻炎への実施も始まっているということです。これらの免疫療法の進歩をとりいれていきたいと考えてい

ます。

アレルギー性鼻炎患者のなかには鼻閉を主訴とし，鼻中隔矯正術等の手術療法が有効であろうと予想される例もあります。当科ではアレルギー性鼻炎を未治療の患者はまずは保存的治療を先行させ，それで症状のコントロール不十分な場合に手術を併用するという方針をとっています。アレルギー性鼻炎患者のなかから手術症例をピックアップしていくことも当アレルギー外来の役割のひとつと考えております。

また当教室の大きな研究テーマのひとつである粘膜免疫の研究を，アレルギー性鼻炎での臨床研究の分野でも展開していけるよう計画しています。

（文責：河野もと子）

## 2．中耳炎外来

中耳炎再来は，黒野教授が赴任されてから開設され毎週火曜日の午前中に行われている。主に滲出性中耳炎を中心にフォローしており，現在マクロライド少量長期投与を中心とするプロトコールを用い，その治療効果の検討を行っている。また，鼓膜切開時に得られる中耳貯溜液を採取し，貯溜液中のサイトカインの測定やsCD14の測定を行うなど，当科における滲出性中耳炎の基礎的研究を支える大事な足場となっている。しかしながら，中耳炎再来でフォローできている症例の数はまだまだ少ないのが現状である。大学病院を訪れる滲出性中耳炎の患者自体がそれほど多くないことや，平日の午前中に行われているため，学校を休んで受診しなければならない小児の患者を定期的にフォローすることは多分に困難を伴うこと，などいくつか問題もあるが今後何とか症例を増やしていきたいと考えている。

（文責：牛飼雅人）

## ３．副鼻腔炎外来（第５回）

### 通常の副鼻腔炎症性疾患・嚢胞栓疾患に対して

本年も副鼻腔炎外来は，内視鏡下鼻内副鼻腔手術（ＥＳＳ）の術後治療と経過観察を中心に継続された。平成10年１月から12月までの嚢胞性疾患も含めた副鼻腔炎に対する手術は67例であった。

通常の慢性副鼻腔炎に対して行われたＥＳＳは，48例，根治手術は１例であった。根治手術例の１例は，かつて根治術をうけた既往を有する症例であった。44例のＥＳＳ中15例（31.3％）で鼻中隔矯正術が同時に行われた。

嚢胞性疾患に対して行われたＥＳＳは，16例で，鼻外のみのアプローチで行われた症例が２例であった。ＥＳＳ下に行われた嚢胞性疾患の中には９例の鼻外からのアプローチとの併用が行われた。部位別では，上顎洞が12例，篩骨洞が３例，前頭洞が２例，蝶形骨洞が１例であった。

### 眼窩吹抜け骨折に対するＥＳＳ下整復術の経過観察

副鼻腔炎症例以外に，平成10年に４例の眼窩吹抜け骨折例に対してＥＳＳ下の整復を試み，副鼻腔炎外来で術後経過の観察を行った。２例は眼窩内側板（紙様板）型，その他の２例は眼窩下壁型であった。４例とも受診時に緊急手術を行った。眼窩吹抜け骨折の整復に関しては，受傷直後ではなく１週間程度保存的に様子を見て複視等の改善を認めない場合に外科的に治療を行うべきとの意見もある。内側板型の１例と下壁型の１例は，受診時既に１週間以上が経過していたが，複視が改善していなかった。内側板型に対しては，ＥＳＳ下に整復を試み，鼻中隔軟骨にて内側板の再建を行った。更に，下壁型の１例もＥＳＳ下に膜様部を大きく開放した後，下壁の骨片等を十分に除去し，鼻内より尿道バルーンカテーテルを挿入し眼球陥没をきたさないように支え固定した。もう１例の小児例では，ＥＳＳ下の整復後経過不良のため入院中に下眼瞼切開によるアプローチを追加した。現時点で少なくとも小児例の１例を除いて，退院後の経過観察で眼科による評価も含め完全治癒が確認できた。平成11年以後，こういった症例に対して，当科では外切開や口腔前庭に切開を加えないＥＳＳ下による整復を第一選択とすることになると思われ，現在さらに症例を重ねている。

ＹＡＭＩＫ輸入販売の許可

平成10年，ついに厚生省によるＹＡＭＩＫ副鼻腔治療用カテーテルの輸入販売許可が得られた。副鼻腔炎外来のみで同症例を扱っているわけではないが，今後，市販後調査や，平成11年６月大分での耳鼻咽喉科臨床学会でのＹＡＭＩＫをテーマとしたシンポジウムを成功させるためにも症例を重ね臨床研究をすすめていくことになる。ＹＡＭＩＫによって得られた副鼻腔貯溜液は，冷凍凍結保存され血管内皮増殖因子，Ｐ６特異的抗体価，ＬＰＳと可溶性ＣＤ14，ＮＦκＢなど粘膜免疫，炎症論研究のための貴重な試料となる。

（文責：松根彰志）

## 4．頭頸部腫瘍外来

頭頸部腫瘍外来は，頭頸部悪性腫瘍患者を対象に治療後の follow-up と治療法の評価を目標に毎週木曜日に特殊外来として行っている。1998年12月末現在登録患者数は，表１の如くである。総登録患者数は，755名，症例数の多い順に喉頭，舌・口腔，中咽頭，下咽頭となっている。1997年の新規登録患者の内訳を表２に示す。喉頭14例，舌・口腔12例，下咽頭10例，中咽頭６例と従来と同様な傾向を示した。

治療法について，その主体を neo-adjuvant chemotherapy 後の手術療法としており，その評価を行った。まず，下咽頭癌では，StageⅢ，Ⅳの進行癌で，化学療法－手術群が42.9％の５生率であった。これは，従来の放射線－手術療法の治療成績（22.9％）を上回っていた。また，中咽頭癌でも，初期治療として化学療法を選択した群（５生率67.5％）が，放射線治療を選択した群（37.8％）より良い成績であった。今後も重ねて neo-adjuvant chemotherapy と切除・再建による治療法の治療成績について検討を重ねていく予定である。

頭頸部癌治療後の QOL という観点から，治療後の患者で味覚異常をアンケートで調査し，ソルセイブによる塩味閾値検査，全口腔味覚閾値検査を施行した。アンケートによる味覚正常群と異常群を比較するとソルセイブでは味覚異常群でその閾値が有意に上昇し，全口腔味覚閾値検査では４基本味に対する閾値上昇は認めなかったが，「うま味」で味覚異常群が正常群に比べ有意に閾値上昇を認めた。頭頸部悪性腫瘍治療後には，総合感覚である「食物の味」が変化し，特に「うま味」閾値は，味覚異常群で有意に上昇しており，食生活の質を表現する味覚機能検査法として有用であると思われた。また，舌・中咽頭の広範切除再建後の嚥下機能について，VTR 透視検査にて検討した結果，嚥下時の舌骨と甲状軟骨の上方および前方への移動度が重要であることが判明した。

今後，さらに検討を重ねていく予定である。　（文責：松崎　勉）

表１　頭頸部腫瘍外来・総登録患者

| 部位 | 患者数 |
|---|---|
| 聴器 | 10 |
| 鼻副鼻腔 | 45 |
| 舌・口腔 | 155 |
| 上咽頭 | 18 |
| 中咽頭 | 112 |
| 下咽頭 | 108 |
| 喉頭 | 215 |
| 甲状腺 | 60 |
| 唾液腺 | 16 |
| その他 | 15 |
| 計 | 755 |

表２　頭頸部腫瘍外来・1998年新規登録患者数

| 部位 | 患者数 |
|---|---|
| 聴器 | 2 |
| 鼻副鼻腔 | 5 |
| 舌・口腔 | 12 |
| 上咽頭 | 2 |
| 中咽頭 | 6 |
| 下咽頭 | 10 |
| 喉頭 | 14 |
| 甲状腺 | 5 |
| 唾液腺 | 3 |
| その他 | 1 |
| 計 | 53 |

# Ⅷ. 1998年度病理集計（病練・外来）

担当　宮之原　利男

1）悪性腫瘍（施行件数142件，対象者85名）

| 腫瘍名（臨床診断） | 人数 | 組織型（病理診断） |
|---|---|---|
| 喉頭腫瘍 | 21 | SCC (18), verrucous ca. (1), basaloid squamous ca. (1) adenocarcinoma (1) |
| 中咽頭腫瘍 | 14 | SCC (14) |
| 舌腫瘍 | 12 | SCC (12) |
| 下咽頭腫瘍 | 11 | SCC (10), carcinosarcoma (1) |
| 甲状腺腫瘍 | 8 | papillary ca. (7), follicular ca. (1) |
| 上咽頭腫瘍 | 6 | SCC (5), undifferentiated ca. (1) |
| 耳下腺腫瘍 | 4 | adenosquamous cell ca. (2), acinic cell ca. (1), Merkel cell ca. (1) |
| 鼻腔腫瘍 | 3 | SCC (1), neuroectodermal ca. (1), cylindrial cell Ca. (1) |
| 上顎洞腫瘍 | 2 | SCC (2) |
| 歯肉腫瘍 | 2 | SCC (1), undifferentiated ca. (1) |
| 皮膚腫瘍 | 2 | SCC (1), basal cell ca. (1) |
| 中耳腫瘍 | 1 | neuroendocrine cell ca. (1) |
| 頬粘膜腫瘍 | 1 | SCC (1) |
| 口唇腫瘍 | 1 | SCC (1) |
| malignant lymphoma | 7 | 生検部位：頸部リンパ節(2)，上咽頭(2)，口蓋扁桃(2)，鼻腔(1) |

2）良性腫瘍（施行件数49件，対象者37名）

| 腫瘍名（臨床診断） | 人数 | 組織型（病理診断） |
|---|---|---|
| 耳下腺腫瘍 | 14 | Warthin tumor (7), pleomorphic adenoma (7) |
| 甲状腺腫瘍 | 5 | follicular adenoma (5) |
| 鼻腔腫瘍 | 4 | papilloma (2), hemangioma (2) |
| 舌腫瘍 | 3 | fibroma (2), rhabdomyoma (1) |
| 顎下腺腫瘍 | 3 | plemorphic adenoma (3) |
| 皮膚腫瘍 | 2 | epithelioma (1), myoepithelioma (1) |
| 喉頭腫瘍 | 1 | papilloma (1) |
| 上咽頭腫瘍 | 1 | lymphangioma (1) |
| 中咽頭腫瘍 | 1 | lipoma (1) |
| 頸部腫瘍 | 1 | schwannoma (1) |
| 頬粘膜腫瘍 | 1 | fibroma (1) |
| 食道腫瘍 | 1 | fibrolipoma (1) |

# Ⅸ. 各省庁諸研究

## 文部省科学研究費（平成10年12月現在）

基盤研究(Ａ)(2)

食生活の質を表現する新しい味機能検査法の開発に関する試験研究

代表者　　松崎　勉

分担者　　黒野祐一，原田秀逸，池田　稔，松根彰志，西元謙吾

基盤研究(Ｂ)(2)

アデノイド・扁桃（NALT）における粘膜免疫応答とその制御機構

代表者　　黒野祐一

分担者　　松根彰志，一宮一成，河野もと子

基盤研究(Ｃ)(2)

呼吸上皮細胞分化関連因子の遺伝子発現と鼻副鼻腔粘膜病態における関与

代表者　　松根彰志

分担者　　黒野祐一，西園浩文，平瀬博文

基盤研究(Ａ)(1)

上気道粘膜免疫機構と経鼻粘膜ワクチン開発の研究

代表者　　茂木五郎

分担者　　黒野祐一，鈴木正志，清野　宏，川端五十鈴，岡本美孝
山中　昇，川内秀之

# XI. 業　　績

## 1. 原　　著

(1) **黒野祐一**，鈴木正志，渡辺哲生，茂木五郎：高齢者の滲出性中耳炎．耳咽頭頸，70(5)増刊号：23～26，1998

(2) 鈴木正志，須小　毅，渡辺哲生，**黒野祐一**，茂木五郎：アレルギー性副鼻腔炎の診断と治療．耳鼻臨床，91(5)：428～432，1998

(3) **松根彰志**，古田　茂，大山　勝：Laser Polypotomy による嗅覚障害の治療．第18回日本レーザー医学大会　大会論文集別冊，199～202，1998

(4) **花田武浩，西元謙吾**：嚥下障害を有する進行性筋萎縮側索硬化症患者の喉頭全摘術．鹿屋市医師会報，213号：５～９，1998

(5) **花田武浩，西元謙吾**，廣田常治：術後に肺血栓塞栓症を合併した甲状腺癌症例．耳喉頭頸，70(13)：925～928，1998

(6) 馬　秀嵐，**上野員義**，栄鶴義人，大山　勝：中国東北部の喉頭癌におけるヒトパピローマウイルス（HPV）DNA の検出．耳鼻と臨床，44(3)：259～265，1998

(7) **F. Dokiya, K. Ueno**, S. Ma, Y. Eizuru, S. Furuta, and M. Ohyama: Retinoblastoma Protein Expression and Prognosis in Laryngeal Cancer. Acta Otolaryngol. 118：759～762, 1998

(8) X. Ma, **K. Ueno**, Z. Pan, S. Hi, M. Ohyama and Y. Eizuru: Human Papillomavirus DNA Sequences and p53 Over-Expression in Laryngeal Squamous Cell Carcinomas in Northeast China: Journal of Medical Virology. 54：186～191, 1998

(9) R. J. Clen, E. H-Y. Cheng, C. L. Karp, D. G. Kirsch, **K. Ueno**, A. Takahashi, M. B. Kastan, D. E. Griffirin, W. C. Earnshaw J. M. Hardwick: Modulation of cell death by Bcl-$x_L$ through caspase interaction: Proc. Natl. Acad. Sci. USA. 95：554～559, 1998

## 2．総　説

(1) **黒野祐一**，鈴木正志，須小　毅，茂木五郎：遊離弁法における術前・術後管理のコツと合併症への対応．JOHNS，14(1)：113～116，1998

(2) **松根彰志**，**西園浩文**，**黒野祐一**：頭頸部病変患者の多臓器不全．JOHNS，14(3)：357～361，1998

(3) 大山　勝，**上野員義**，**河野もと子**：小児の喉頭腫瘍．JOHNS，14(7)：955～958，1998

(4) 大山　勝，**上野員義**：下鼻甲介手術－病態別にみた術式と適応－．JOHNS，14(12)：1779～1783，1998

(5) **上野員義**：分子レベルからみた炎症細胞の機能．JOHNS，14(3)：311～314，1998

## 3．著　書

M. Ohyama, **K. Ueno**, **D. Seki** and Y. Eizuru
「Molecular Biological Studies on Nasal T-Cell Lymphoma」
Proceeding of the XVth International Symposium on Infection and Allergy of the Nose. (edited by P. van Cauwenberge et al), Kagler Publications, The Netherlands, 1998

## 4．その他

黒野祐一
Medical View Points「鼻アレルギーにおける IgE 産生部位としての扁桃の役割」
医事出版社，1998年12月20日，第12号

松根彰志
アレルギーの臨床「アレルギーの予防と治療　Q＆A'98」
北隆館，1082，1998

## 5．国内学会発表

(1)　特別講演

第28回　日本耳鼻咽喉科感染症研究会　９月５日（神奈川）
会長指名講演
「上気道感染症と粘膜免疫」
**黒野祐一**

第８回日本耳科学会　10月22日～24日（宮城）
ランチョンセミナー
「滲出性中耳炎のマクロライド療法　－サイトカイン産生とマクロライド－」
**黒野祐一，牛飼雅人，松根彰志**，渡辺哲生，末永　智，茂木五郎

(2)　シンポジウム

第34回　鼻科学基礎問題研究会「鼻科学とアポトーシス」　10月１日（福井）
「アポトーシス制御における Bcl-2の機能　－Bcl-2には，生と死の二面性がある－」
**上野員義**

(3)　一　　般

第８回　日本頭頸部外科学会総会・学術講演会　１月23日～24日（大阪）
「部分的軟口蓋全層欠損に対する再建の２症例」
**松崎　勉，西園浩文，平瀬博之，福岩達哉**，古田　茂
「頭頸部外科手術後の MRSA 感染症の検討」
**西園浩文，松崎　勉，平瀬博之，関　大八郎，福岩達哉**，古田　茂

鹿児島救急医学会　３月28日（鹿児島）
「小児の気管切開について～急性声門下狭窄症と喉頭軟化症～」
**福山　聡，西園浩文，松根彰志，松崎　勉，黒野祐一**

第25回　日耳鼻南九州合同地方部会学術講演会　４月18日（熊本）
「当科におけるγ－ナイフの使用経験と問題点」
**林　多聞，松崎　勉，福山　聡，岩坪哲治，牛飼雅人，西園浩文，河野もと子，黒野祐一，岩下睦郎，福島泰裕**，八代一孝，中村克己
「顔面神経再建を行った耳下腺扁平上皮癌の一例」
**出口浩二，花牟礼　豊**，笠野藤彦，鹿島直子
「副咽頭間隙に発声した Hemangiopericytoma の一例」
**花田武浩，岩下睦郎，西元謙吾**，小濱紀子

「当科における中耳癌の３症例」
平瀬博之，西園浩文，松崎　勉，松根彰志，上野員義，黒野祐一，福島泰裕，
花牟礼　豊

第18回　気道分泌研究会　５月９日（宮城）
「鼻副鼻腔炎症性疾患における血管内皮増殖因子」
松根彰志

第99回　日本耳鼻咽喉科学会学術講演会　５月21日～23日（北海道）
「INF-γノックアウトマウスにおけるＰ６に対する粘膜免疫応答」
黒野祐一，藤橋浩太郎，jery R. McGhee，清野　宏，茂木五郎
「乳頭腫に続発した舌扁平上皮癌の一例」
牛飼雅人，福岩達哉，松崎　勉，河野もと子，黒野祐一
「副鼻腔炎の画像診断－当科における Haller's cell を中心に－
岩坪哲治，松根彰志，相良ゆかり，河野もと子，黒野祐一
「頭頸部悪性腫瘍患者における術前自己血貯血療法」
福山　聡，西園浩文，松崎　勉，小川和昭，黒野祐一

第22回　日本頭頸部腫瘍学会・第19回 頭頸部手術手技研究会 ６月10日～12日（名古屋）
「鼻副鼻腔悪性リンパ腫（stage ⅠⅡ症例）の臨床集計的検討
西園浩文，関　大八郎，上野員義，松崎　勉，内薗明裕，黒野祐一
「頭頸部扁平上皮癌における MRP の発現と臨床病理学的因子との関係」
福岩達哉，竹林勇二，松崎　勉，秋山伸一，黒野祐一

第78回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会　６月21日（鹿児島）
「下咽頭梨状陥凹瘻の一例」
西園浩文，松崎　勉，牛飼雅人，黒野祐一
「甲状腺癌術後に急性肺血栓塞栓症を生じた一例」
花田武浩，西元謙吾，廣田常治
「頭頸部外科領域のガンマナイフ治療」
福島泰裕，松元哲郎，八代一孝，中村克己
「当科における Anterior Spinotomy 手術症例」
笠野藤彦，花牟礼　豊，鹿島直子，相良ゆかり，出口浩二
「学校検診でのディスポ製品使用経験」
山本賢之，伊東一則，内薗明裕，杉原純次，島　哲也，上村達郎

第60回　耳鼻咽喉科臨床学会　６月26日～27日（岡山）
「当科における中耳癌の３症例」
平瀬博之，西園浩文，松崎　勉，松根彰志，上野員義，黒野祐一

「当科におけるγナイフの使用経験と問題点」
**林　多聞，松崎　勉，福山　聡，岩坪哲治，西園浩文，黒野祐一，福島泰裕，**
中村克己，八代一孝

第13回　九州連合地方部会学術講演会　８月29日（福岡）
「眼窩内側壁吹き抜け骨折に対する内視鏡下鼻内整復術」
**西元謙吾，松根彰志，黒野祐一**
「耳科手術における自己フィブリン糊の使用経験とその有用性」
**福岩達哉，西園浩文，松崎　勉，黒野祐一**，丸山芳一
「頭頸部動静脈奇形の一例」
**相良ゆかり**，笠野藤彦，**花牟礼　豊**，鹿島直子，西　広和

第28回　日本耳鼻咽喉科感染症研究会　９月５日（神奈川）
「当科における術後 MRSA 感染」
**西園浩文，松崎　勉，平瀬博之，黒野祐一**
「扁桃下極に膿瘍の生じた扁桃周囲膿瘍の１例」
**福山　聡，牛飼雅人，黒野祐一**

第11回日本口腔・咽頭科学会総会　９月17日～19日（京都）
「中咽頭癌治療後の嚥下機能の評価」
**松崎　勉，西園浩文，平瀬博之，西元謙吾，黒野祐一**
「副咽頭異物肉芽腫の１症例」
**西園浩文，関　大八郎，上野員義，松崎　勉，黒野祐一**
「頭頸部悪性腫瘍治療後の味覚機能の検討」
**西元謙吾，松崎　勉，西園浩文，黒野祐一**

第37回　日本鼻科学会総会　10月２日～３日（福井）
「鼻副鼻腔炎症性疾患における血管内皮増殖因子」
**松根彰志**，井手章子，**大城　浩，宮之原郁代**，丸山征郎，**黒野祐一**
「当科における蝶形骨洞・篩骨洞の孤立性病変の検討」
**宮之原郁代，松根彰志，福山　聡，黒野祐一**

第８回日本耳科学会　10月22日～24日（宮城）
「耳科手術における自己フィブリン糊の使用経験とその有用性」
**福岩達哉，西園浩文，牛飼雅人，松崎　勉**，丸山芳一，**黒野祐一**

第31回甲状腺外科研究会　10月29日～30日（千葉）
「副咽頭間隙に転移した甲状腺癌の一症例」
**西園浩文，松崎　勉，黒野祐一**

第50回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会　11月５日～６日（兵庫）
「当教室での下咽頭悪性腫瘍 stage Ⅰ・Ⅱ症例の治療成績検討」
**平瀬博之，松崎　勉，花牟礼　豊，黒野祐一**
「咽頭，反回神経，気管に浸潤をきたした甲状腺癌の検討」
**関　大八郎，西園浩文，黒野祐一**

第48回日本アレルギー学会総会　12月１日～３日（兵庫）
「鼻アレルギーにおける血管内皮増殖因子（VEGF)」
**松根彰志，大城　浩，河野もと子，黒野祐一**，井手章子，丸山征郎

## ６．国際学会発表

The Third Asian Research Simposium in Rhinology (ARSR) ８月28日～29日 (愛知)
「The role of interferon (IFN) -γ in inducing IgA responses in nasal mucosa against outer membrane protein
P6 of nontypeable Haemophilus influenzae
**Y. Kurono**, K. Fujihashi, G. Mogi, H. Kiyono
「Vascular Endothelial Growth Factor (VEGF) in Rhinosinusitis
**S. Matsune**, S. Ide, I. Maruyama, **Y. Kurono**

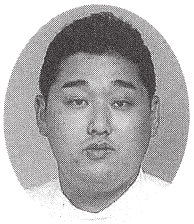
Fifth International Academic Conference on Immunobiology in Otology, Rhinology and Laryngology October 11-14 (Siena-Florence)
「Mucosal immune responses against outer membrane proteins of Haemophilus influenzae」
**Y. Kurono**, G. Mogi
「Roll of vascular endothelial growth factor (VEGF) in nasal allergy and paranasal sinusitis」
**S. Matune, H. Ohshiro, S. Fukuyama**, S. Ide, I. Maruyama, **Y. Kurono**
「Immune responses of human palatine tonsils against P6」
**S. Fukuyama, S. Matune, Y. Kurono**, N. Sakamoto, G. Mogi

THE 1998 SEVEN DEPARTMENTS JOINT MEETING OF OTOLARYNGOLOGY November 27-29（大分）
「Clinical evaluation of taste dysfunction aftar treatments of head and neck cancer」
**K. Nishimoto, T. Matsuzaki, H. Nishizono, Y. Kurono**
「Stereotactic gamma radiosurgery for head and neck cancer」
**T. Hayashi, T. Matsuzaki, S. Matune, Y. Kurono**
「Application of autologous fibrin glue for ear surgery」
**T. Fukuiwa, H. Nishizono, M. Ushikai, T. Matsuzaki**, Y. Maruyama, **Y. Kurono**

# Ⅺ. 医局通信

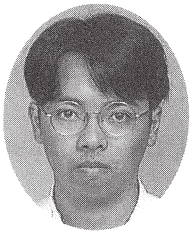
## 1．新入医局員紹介

高　木　　実



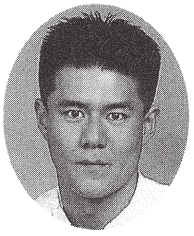
**自己紹介**：この度鹿児島大学耳鼻咽喉科教室に入局させていただきました高木実と申します。入局して早１年が過ぎようとしておりますが，まだまだ諸先生方にご迷惑をかけている毎日です。早く１人前の医師と成れるよう精進していく所存です。今後とも御指導，御鞭撻のほどよろしくお願いします。

森　園　健　作



**自己紹介**：僕が鹿大の耳鼻咽喉科に入局して，一応はやくも１年が経過しようとしております。大学時代をなんとなく適当に過ごしてきた僕にとっては，この１年間は得るものが非常に多かったです。耳鼻科的なものはもちろんですが，人間関係や社会人として果たすべき義務や責任といったことについても，周りの皆様に折にふれご指導いただきました。１年間経った今でもいまだに反省すべき点が多く，皆様方にご迷惑をかけることばかりですが，とりあえずよろしくお願いします。すいません。

## 吉　福　孝　介



**自己紹介**：みなさん，はじめまして新入医局員の吉福です。

去年，医師国家試験を無事 pass し，現在，鹿児島大学耳鼻咽喉科に所属していられる事に対してうれしく思う今日この頃であります。自分は，鹿児島で生まれ，幼稚園は東京で，浪人までは千葉で過ごし，大学は島根医科大学であります。鹿児島で生活したのはたったの７ヶ月ぐらいでありますが，程よい町ときれいな海があって，暖かくとても住み心地の良い所であります。今年１月から大島郡医師会病院に行く事となりましたので，鹿児島を離れてしまう事に対し，少し残念ではありますが，大島もイイトコロと言う事でありますので大変楽しみにしております。

これからも鹿児島大学耳鼻咽喉科教室の発展の為に，精一杯頑張って行こうと思っております。今後とも，ご指導の程宜しくお願い致します。Surfin OK?オッケイ～

## 2．海外留学帰国報告

鮫　島　篤　史

1996年10月から，アメリカ合衆国アイオワ州アイオワ大学病理学教室に，留学しておりましたが，1998年９月，２年間の留学をおえ，帰局いたしました。

留学先のDr. Turekの研究室は，これまでにも，牛飼雅人先生，河野もと子先生が留学されていた研究室で，扁平上皮癌におけるパピローマウイルスの関与について遺伝子レベルでの研究を専門にしている所です。私の与えられた研究課題は，これまで困難とされたin vitroでのパピローマウイルスの複製・増殖を，証明するというものでした。細胞培養・PCR・Southern-Blotting等々，慣れない英語でみんなに聞いて，実験をおこないました。研究では，テクニカルな点でも，参考になりましたが，何よりももっとも感銘したのは，研究に対する，アイデア・センス・情報収集能力の長けている点でしょうか。特に，情報に付いては，過去の実験データーが，すべてコンピューターに集積されており，必要とあらば，すぐさま検索し，参考に出来ることでした。また，疑問があれば，インターネットで検索し，EMAILで情報交換をする姿を，目の当たりにし，コンピューターの有用性を実感しました。

簡単に研究について触れさせていただきましたが，やはり留学の大きな成果は，アメリカの生活を実感できたことでしょう。アメリカといっても，ニューヨークやロスのような大都市ではなく，映画「フィールド・オブ・ドリームス」のような大自然の中です。町を出れば，見渡すばかりのとうもろこし畑，まっすぐ続く道路，そして，所々，転がっている，交通事故死した鹿の死体。そういう，環境ですから，バーベキューを楽しめる，広い公園がいくらでもあり，わずか＄10でまわれるゴルフ場あり，お金をかけなくても（お金が無くても），余暇を十分楽しめます。特に夏場は，日没が８時過ぎですから，アフター５でも，18ホールまわれて，実に有意義に過ごせます。

町自体も，小さな大学の町で，田舎ならではの，人の良さと，治安の良さを実感できます。ここの住人は，車のドアにかぎはかけず，夜にジョギング出来ることを，自慢しています。

また，毎週土曜日，各家々や教会でひらかれる，ガレージセールや，チャリティーセー

ルも，ささやかな楽しみのひとつです。衣類・おもちゃの類から，売れそうも無いガラクタ同様の芝刈機や自転車まで並んでおり，その中から，欲しいものを安くで探してまわるアメリカ人に遭遇します。バブリーな余韻を引きずった日本からきた私には，最初は「えらい，けちなアメリカ人」としか映りませんでしたが，徐々に，物を大切にし，また倹約するストイックなアメリカ人の姿が見えてきました。消費は美徳と，無駄に資源を浪費してきた日本人としては，豊かな国アメリカが，実はこのような人々によって支えられてきたことを知り，いたく感銘しました。

２年間，研究だけでなく，アメリカで暮らすという貴重な経験が出来ました。このような機会を与えてくださった皆様に感謝いたします。

## 3．学会報告

# 第48回日本アレルギー学会

松　根　彰　志

私は，今回初めて日本アレルギー学会に出席する機会を得ました。その学会がたまたま記念すべき学会でした。と云いますのは，例年ならば，別々に開かれている日本アレルギー学会，日本免疫学会，日本臨床免疫学会が今回は統合され，11月30日から12月６日までの一週間を「免疫・アレルギー週間連合学会」として，大阪大学総長の岸本忠三会長のもと復興著しい神戸市の神戸ポートピアホテルで開催されたからです。

一言で云いまして，実に刺激的な学会でした。数多くの特別講演，セミナー，シンポジウムがありましたが，やはり，ラホーヤアレルギー免疫研究所名誉所長の石坂公成先生のオープニングレクチャー「アレルギーと免疫学」，岸本忠三先生の会長講演「Interleukin 6; from gene to clinic」は，とても感動的なものでありました。

石坂先生といえばIgE，IgEといえば石坂先生ですが，今日アレルギー性鼻炎をはじめとするＩ型アレルギー反応を説明する際当然のように出てくるIgEが，当時ジョンスホプキンスにおられた石坂先生御夫妻により，８年もの歳月をかけて遂に1967年その発見を成し遂げられた経緯には，ただただ感心するのみでした。石坂先生は，まだまだ大変お元気でその講演たるや流暢でよどみなく本当にびっくりいたしました。もう10年前になりますが，私がアメリカ・ピッツバーグ留学中の1989年にサンディエゴでAAO（American Academy of Otolaryngology）が開催された際，ラホーヤの研究所のことは当時から知っていたのでミーハー気分で行ってみましたが，いまだお元気で活躍しておられる姿には後光がさしているようにさえ思われました。

岸本先生は内科の先生ですが，岸本先生といえばIL6，IL6といえば岸本先生です。先生は，IgEの発見や抗体産生におけるT，Bリンパ球の役割などが解明されだした頃にアメリカに留学され，以後Ｂ細胞の分化因子であるIL-6の構造を1986に明らかにされ，その後IL-6およびその受容体のシグナル伝達へと研究は進み，シグナル伝達物質gp130，サイトカインシグナル伝達のカスケードJAK-STAT系の解明，さらにはそのJAK-STAT系の阻止因子SSI-1の発見，そしてノックアウトマウスの活用へと「系統的かつ戦略的に」研究をすすめてこられたことがひしひし迫力をもって伝わってきまし

た。更に，最後にはこれらの基礎的な知見に基付き臨床家らしくIL-6とキャッスルマン病，多発性骨髄腫，慢性関節リウマチといった疾患の病態，治療の話に至るといった具合で，恩師で日本の免疫学の基礎を築いた「山村雄一先生に本講演を捧げる」として講演を結ばれました。臨床に始まり，基礎的病態論を最新の研究手法をもって展開し，また診断や治療にもどるといったスタイルはどの分野であれ，大学に籍を置く限りは理想として頑固に追求されるべきと考えていますので大変感動いたしました。また，故山村雄一先生と云えば，歴史的には結核菌のcell wall skeletonによる癌の非特異的免疫療法が頭に浮かびますが，私がまだ学生の頃，鹿児島大学にも講演に来ていただいたことがなつかしく思い出されました。

その他，DNAワクチンによるアレルギーの治療などは，今後のアレルギー治療を大きく変える可能性のある研究として大変興味深く思われました。

ところで，私は，「鼻アレルギーにおける血管内皮増殖因子（VEGF)」という（一般）演題を発表いたしました。腫瘍の分野では，治療への応用も含めて既にかなり広く研究が行われているテーマですが，炎症性疾患，とりわけ気道炎症の分野ではまだまだこれからといったところです。現時点では，耳鼻咽喉科領域では，千葉大学からもVEGFの発表があり（この学会ではありませんが)，福井医科大学からは，VEGFではありませんが血管内皮増殖因子であるPlatelet derived endothelial cell growth factorの発表が本学会でありました。

こういった学会に演題を持って参加し，同じような分野の先生と親交を深め，全国レベル，国際レベルの業績に接し，大学に帰ってきてからも，その感覚を維持して地道に努力することが肝要であると思いました。

# 第11回日本口腔咽頭科学会

西　元　謙　吾

さる平成10年９月17・18・19日の３日間，国立京都国際会議場において第11回日本口腔咽頭科学会が開催されました。学会の内容は，ランチョンセミナーあり多数のシンポジウムあり手術手技のビデオ検討会ありと，なかなか密度の高いものとなっていました。シンポジウム，演題の中で特に目立ったものは，当科でも研究が進められている扁桃組織，唾液腺腫瘍，悪性腫瘍術後の再建などについての発表が印象に残っています。この学会の母体が扁桃研究会ということもあり，扁桃における最新の研究の成果から，今まで曖昧な知識であったことに対する復習のような意味あいを持つものまで幅広い分野に渡って扁桃組織に関する演題が並んでいました。いずれも飽きさせるようなものは少なく，みっちり勉強させていただきました。（おかげで抜け出して観光すると言うような考えは浮かんできませんでした）

さて，昼間の観光がダメなら夜の京都を楽しもうと言うことですが，昼間の勉強がたたったのかそれほどパワフルな活動はせず，比較的おとなしめのアフターファイブでした。

# 第99回日本耳鼻咽喉科学会総会

牛　飼　雅　人

第99回日本耳鼻咽喉科学会総会は，平成10年５月21日から５月23日まで北海道大学の主催で札幌市のロイトン札幌で行われ，医局からは，黒野教授を始め，松根，福山，ホルへの各先生と私の５人が参加した。４日間の学会期間中，宿題報告２題，シンポジウム２題，特別講演１題，招待講演２題，教育セミナー８題を始めとして一般演題も554題を数え，非常に盛りだくさんの内容であった。宿題報告では福井医科大学の斉藤先生が，「口腔・中咽頭癌の基礎と臨床」と題して発表された。抗癌剤に対する癌細胞の感受性や耐性に関する基礎的研究に始まり，光線力学的治療，癌関連遺伝子の分析，PD-ECGF や G-CSF からみた癌の生物学的特性，そして遺伝子治療に至る内容で，その研究内容の質の高さとボリュームに圧倒され，まさにあっと言う間の一時間であった。もう一題の宿題報告は，北里大学の広瀬先生により「音声障害の臨床」と題して行われた。ビデオを多用した視覚的に理解しやすい発表であり日常診療においてもすぐに役立つ内容であった。また，発表内容が本としてだけではなく CD-ROM 付きで販売されたことも画期的であった。一般演題の方で目を引いたのは遺伝子治療に関する話題で，一つの群が遺伝子治療に関する発表に割り当てられ耳鼻咽喉科の分野でもいよいよ遺伝子治療の研究が本格化してきた感がある。今回の私の発表は，ポスター演題で気分的には比較的楽であったが自分のポスターの前に立っていると何年も会っていない知り合いから声をかけられたりしてポスター演題もたまには悪くないものである。

さて，札幌といえばやはりカニであり，ラーメンであり，そしてすすきのである。学会直前に体調を壊し参加できなかったＩ先生のことを思うと胸が痛んだが，結局Ｉ先生の分まで海の幸やラーメンを満喫させていただきました。え，すすきのの夜の話？　それは内緒です。

# 第60回耳鼻咽喉科臨床学会

平　瀬　博　之

第60回耳鼻咽喉科臨床学会は平成10年６月26日㈮，27日㈯の２日間，岡山市の旭川のほとり，岡山衛生会館と隣接する三光荘を会場に開催されました。本学会に参加すべく私は前日の25日より黒野教授と林先生とともに岡山入りしました。学会会場は５会場にもわたり，241個もの一般演題に，シンポジウムが「日常臨床における病巣感染を探る－IgA 腎症および掌蹠膿疱症の扁摘による効果－」と「難聴と遺伝子異常」の２つ，臨床パネルでは「鼓室形成術での手技上の工夫」，ランチョンセミナーでは前教授であられる大山　勝先生の「慢性副鼻腔炎に対するマクロライド系抗生物質少量長期投与の現状」を始め２つなど大変規模の大きい学会で，また日常臨床にすぐ直結するような内容のものが目立ちました。当教室からは私の「当科における中耳癌の３症例」，林先生は「当科におけるガンマナイフの使用経験と問題点」を発表させていただきました。また教室 OB の内薗明裕先生が「問診表から見た患者のニーズについての検討」を，前助教授の古田　茂先生が「不明熱を主訴とした鼻内手術症例」を発表されていて各先生とも活発な質疑応答が交わされていました。また海外からの特別講演が２題，会長招待講演は精神科医でオウム心理教問題でもテレビ等で活躍され著明な犯罪心理学者の小田　晋先生が「みみ・はな・こころ」を講演され，耳鼻咽喉科臨床と精神医学との緊密な関連性を改めて思い知らされました。

アフター５はというと，一晩目は黒野先生を筆頭に岡山のうまいものさがしにでかけ，私と林先生はお供させていただきました。宿泊したホテルで薦められた「夜寿司」なる怪しげな店名の寿司屋にいきましたが当地の珍しいものは「ままかり」ぐらいのもので，やや期待はずれの感がありました。なお，私と林先生はアルコールを飲めないため，一人で飲まれていた黒野先生はどことなく寂しげでありました。二晩目は学会懇親会に参加後，ホテルのラウンジで皆で雑話にもりあがりましたが，シンポジウムの打ち合わせをかねて26日昼より松根先生がこられたため，この時は黒野先生も飲む相手がいたことで一晩目の分まで取り返す様に，アルコールもすすんでいたようでした。また学会場に近接し日本三庭園の一つの後楽園と竹久夢路美術館があったため，学会で疲れた頭を休めに？林先生と共に少々？散策し，気分転換？もしました。

なお次回本学会の主催は，黒野教授の前任地であられる大分医科大学により，別府市で行われるそうです。きっと今回以上の盛り上がる学会となることでしょう。

# 第８回日本耳科学会総会

福　岩　達　哉

平成10年10月22日から24日まで第８回日本耳科学会総会が開催され出席・発表してきました。東北大学が担当ということで仙台市仙台国際センターで開催されましたが，東北の秋は大変美しく，色鮮やかな紅葉に囲まれた学会会場も洗練された素晴らしい建物でした。この会場で一般演題287題を中心とする学術講演会が開催されました。

その中でもっとも興味深く感じたのはパネルディスカッション「鼓室形成術不成功例の検討」でした。湯浅涼先生の司会で，パネリストの先生方が実際に経験した不成功例を提示し，なにが失敗の原因であったのかを討論するというもので，非常に熱い討論が展開されました。耳科手術上達の秘訣として「手術時のビデオを撮影しそれを後で繰り返し見ること」「手術時のビデオを10分程度に編集させることで，手術のポイントがわかっているかどうかわかる」などの意見が出ましたが，これは今後実践していきたいと思いました。

ランチョンセミナー「滲出性中耳炎のマクロライド療法」では黒野教授が「サイトカイン産生とマクロライド」というテーマで，中耳貯溜液中の炎症性サイトカインを測定しマクロライド使用の有無で差があるかどうかを検討したデータを御講演されました。

私は今回「耳科手術における自己フィブリン糊の使用経験とその有効性」という演題で発表させて頂きましたが，近年の血液製剤による感染症の問題もあってか，多くの先生方に御拝聴頂き，今後も自己血製剤の利用を勧めていくべきであると実感しました。

夜は，仙台名物「牛タン」を堪能し，牡蠣尽くしをつまみに日本酒を楽しませて頂きました。本場で飲む日本酒は格別であり，帰りには大量に日本酒を買い込み「行商人」状態になってしまいました。

このように大変充実した学会参加ができましたことを，今回の発表でお世話になりました諸先生方に深く感謝しております。

# 第37回日本鼻科学会

宮之原　郁　代

第37回日本鼻科学会は，1998年10月１～３日の３日間にわたり，福井県で開催されました。当教室からは，黒野教授，上野先生，松根先生と私が参加しました。シンポジウム２つ（Ⅰ嗅覚研究の最前線，Ⅱ鼻アレルギーの最前線），ランチョンセミナー２つ（Ⅰアレルギー性鼻炎のQOL，Ⅱアレルギー性鼻・副鼻腔炎）と，特別講演は，ディーゼルエンジン粒子とアレルギーとの関連をいち早く精力的に研究されているUCLAの臨床免疫アレルギー内科のSaxon教授によるものでした。とくに，シンポジウムⅠ嗅覚研究の最前線においては，嗅覚障害に対する，最新の様々なアプローチの成果が発表されました。ニオイ分子受容機構－ニオイ分子の識別および類別のための神経メカニズム，PET・f MRIを用いた嗅覚系の解析，脳磁図による嗅覚中枢の同定に関する研究，神経伝達物質と嗅覚障害の検討，ニオイ刺激誘発脳波を用いた他覚的嗅覚検査法など，それぞれの立場での新しい展開が繰り広げられ，（内容が高度で，全て十分理解出来たと言うわけではありませんが）非常に興味深いシンポジウムでした。なかでも，ニオイ刺激誘発脳波を用いた他覚的嗅覚検査法は，嗅覚の客観的評価の手法として，ヒトの臨床検査への応用が期待されるものでした。

さて，福井県の観光名所は，幾つか挙げられるかと思いますが，私は，学会の合間を縫って，曹洞宗大本山，永平寺へ，出かけました。永平寺は，今から約750年前，道元禅師によって開創された出家参禅の道場です。老杉に囲まれた寺内は，隅々まで掃除がゆきとどき，美しい佇まいです。私の記憶には，確かNHKの‘行く年来る年’で，ここ永平寺で，除夜の鐘をついているシーンが焼き付いていたのですが，残念ながら昨年の‘行く年来る年’では，登場しなかったようです。

最後に，飛行機と，JRを乗り継いで行った，鹿児島から非常に遠い地でしたが，お酒と魚貝類が，おいしかったです。唯一残念なことは，鹿児島の醤油を持っていくのを忘れていたことですが……。

# 第34回鼻科学基礎問題研究会

上　野　員　義

## シンポジウム「鼻科学領域におけるアポトーシス」

近年の，細胞死（アポトーシス）の研究を通し，いかに細胞が，死を決定実行するかということは，基礎的研究の興味のみならず，個体の発生，恒常性の維持，ひいては疾病の発生に大きく関与していることが明らかになってきた。

ここに，アポトーシス医学ともいえる新しい学問が確立され，臨床への応用が期待されている。耳鼻咽喉科領域においても，盛んに研究が開始されてきている。今回，大阪医科大学竹中　洋教授の司会のもと，シンポジウム「鼻科学領域におけるアポトーシス」が開催された。

Fasの発見者であり，アポトーシス研究の第一人者である京都大学ウイルス研究所の米原　伸教授が，アポトーシス研究の基調講演を行い，Fasを介するアポトーシスの生理機能と病態作用について報告した。上野はアポトーシス制御において，Bcl-2は，生と死の二面性の機能を持ち合わせていること，癌ウイルスのBcl-2ホモログは生の一面生のみを持ち合わせ，多段階的修飾を受けることで発癌にいたるメカニズムが示唆されることを報告した。

続いて臨床研究として，福井医大伊藤講師が，上顎癌予後マーカーとしてのアポトーシス関連因子Baxの発現を統計学的に報告した。大阪医大の今中講師が，好酸球の脱顆粒のメカニズムにアポトーシスが関与することを報告した。金沢大学の土定講師は，神経成長因子（NGF）は，マウス嗅細胞のアポトーシスを制御することをTUNEL法にて証明した。

今後，アポトーシス研究は，基礎的研究の進歩に伴い，遺伝子治療を含めた臨床応用も益々期待される。

## シンポジウム「アレルギー性鼻炎の手術療法」

保存的治療に抵抗性の中等度以上のアレルギー性鼻炎症状に対し，近年さまざまな手術療法が試みられ，優れた成績が報告されつつある。千葉大学の今野昭義教授の司会で，下甲介粘膜化学剤手術（北里大学，八尾先生），下甲介粘膜表層レーザー焼灼術（関西

医大，川村先生），深層も含めた下甲介粘膜レーザー焼灼術（東北大学，鈴木先生），下甲介粘膜高周波電気凝固術（日本医大，大久保先生），粘膜下下甲介骨切徐術（福井医大，森先生），下甲介粘膜広範切徐術（千葉大学，長谷川先生）などが報告された。いずれの，報告もその簡便性，安全性，臨床効果における有用性を強調していた。しかし，今後の課題は，その長期成績（３－５年）と思われる。手術の簡便性と，長期成績が，手術療法選択の，最大の指針と思われた。

# 第８回日本頭頸部外科学会

西　園　浩　文

第８回日本頭頸部外科学会総会及び学術講演会（会長　関西医科大学耳鼻咽喉科　山下敏夫教授）が，平成10年１月23・24日の両日大阪国際交流センターにて行われた。

シンポジウムとして「頭蓋底外科の現状と将来」「鼓室形成術－歴史と展望」の２題が行われた。頭蓋底外科については，複雑な頭蓋底副咽頭間隙の局所解剖から鼻副鼻腔癌及び聴器癌における頭蓋底の取り扱い，最後にチーム医療の立場から頭蓋底手術に対する脳外科医，耳鼻咽喉科医の共同作業の重要性が強調された。鼓室形成術については鼓室形成術における外耳道と乳突胞の取り扱い，一期的手術か段階手術か，再建材料等について日本の著名な耳科手術者による自らの手術成績にもとずいた討論が行われた。

教育パネルとして「境界領域における耳鼻咽喉科医の守備範囲」「内視鏡手術の適応拡大－Office Surgery をめざして」が取り上げられた。「境界領域－」では口腔病変に対する口腔外科との関係，甲状腺疾患における外科との関係，頭蓋底外科での脳外科，形成外科との関係，下咽頭疾患における食道外科との関係について特に役割分担を明確にすることの大切さと協力体制の確立の必要性について論じられた。「内視鏡手術－」においてはナビゲーションシステムの紹介と内視鏡下の Vidian neurectomy，アデノイド切除，下鼻甲介レーザー手術，涙道再建，下垂体手術の紹介と喉頭内視鏡手術について紹介された。

一般演題では指定演題として「私の手術法の工夫」が多く発表され臨床上大変参考になる内容が多かった。当教室からは「部分的軟口蓋全層欠損に対する再建の２症例」と題し松崎が，軟口蓋部分欠損に対する真皮欠損用グラフトと鼻唇溝皮弁の応用について，

また「頭頸部外科手術後のMRSA感染症の検討」と題し西園が，当科におけるMRSAの検出状況とその対策について口演した。

## Fifth International Academic Conference on Immunobiology in Otology, Rhinology and Laryngology

福　山　　聡

～その１～

思いのほかSienaの秋は暖かくそして湿気がなく快適な気候の中，学会は行われました。会場はSiena郊外の医科大学で会期は10月11日から14日までの４日間，oralとposter合わせて演題の数は120でした。当科からは黒野教授，松根先生と私の３人が参加しました。黒野教授は二日目に演題発表されました。演題は‘Mucosal immune response against outer membrane proteins of *Haemophilus influenzae*’でした。松根先生は三日目，鼻アレルギーと副鼻腔炎での血管内皮増殖因子の役割について発表されました。私はポスター発表でしたので初日に展示しましたが，スケジュールの中にポスターセッションが設けてあるわけでなく，貼りっぱなしという印象がありました。ポスター会場は通路にポスターを貼る為の看板が用意してあるだけで，またプログラム上はoralの先生がポスターを貼っているなど日本では考えられない光景を見てしまいました。演題の中で強く印象に残りましたのは大分医大の有田先生の演題でした。フローサイトメトリーやELISPOT等の手法を用いたアデノイドのＢ－１細胞のasseyについてよくまとめておられましたが，それらの手法が今現在自分の取り組んでいるものですので，よい参考になりまた刺激になりました。その他，当科外来でおなじみのYAMIKカテーテルについて開発の歴史（YAMIK１号から最新型まで）などをロシアのDr. Kozlovが熱く語られました。発表は当然ながらすべて英語でなされ，英語が苦手の私にはかなり厳しいもので，今まで英会話のトレーニングを怠っていた事が改めて悔やまれる学会となりました。私にとってのこの学会は新しい知識の習得というよりは国際感覚を養ううえで極めて重要なintroductionであったと思います。

～その２～

成国空港から黒野教授と松根先生と私がローマに着いたのは午後10時をまわっており，

ホテル内のサービスは終了していたので，ホテルの傍のファミリーレストランで夕食を摂りました。そこの店長らしき人は非常に愛想よく働いていたのですが，その他の店員はまるでやる気のない店でした。その時はこれが本場のイタリアレストランなんだなと思ったのですが，後にも先にもそのような店はここだけで，イタリア人はひとなつっこくとても親切でした。

翌日，学会用のShuttle BusでSienaに向けてローマを発ち，途中，海岸沿いをバスがとおると白壁の家，青い海と乾いた風はイタリアに来たことを実感させるには充分でした。Sienaは中部イタリアの古い町で，町は城壁で囲まれ中心には大きな広場があります。道路は石畳で13世紀の町並みがそのまま残っています。学会のWelcome partyは狭い会場でぎゅうぎゅう埋めでバイキング形式のおいしそうなイタリア料理もほとんど手がつけられませんでした。驚いたのは会場の係りの女性（後から分かったのですが地元のENT doctor）までも我先に料理に手を伸ばしていることで，いきなり文化の違いを痛感させられました。Sienaのあるトスカーナ地方はワインの産地として有名らしく，確かに深みのある美味しいワインでしたので滞在中たっぷりいただきました。大概の料理（パスタやデザート）はさすがにおいしかったのですが，‘グリーンサラダ’は本当にレタスのような葉っぱがちぎって盛られているだけで，料理のオーダーで唯一の失敗でした。

学会の合間にピサの斜塔を見に行くことになりました。Sienaから鉄道とバスを使って約２時間で斜塔のある公園に着きます。公園の入口を抜けるといきなり目の前に斜塔が姿をあらわし，さらに新聞売りの子供らが松根先生を取り囲んであっという間に立ち去っていきました。それがジプシーの襲撃であった事に気付くのに１分と時間はかかりませんでした。Sienaがあまりにものどかな町だった為でしょうか私たち一行に気の緩みが多少あったことは否定できません。ジプシー事件後は子連れの母親には異常に警戒する旅となった訳ですが松根先生が襲撃にあったという知らせは瞬く間に学会に参加されている先生方に伝わり驚かされました。

それでも学会は無事に終了し，日本に帰るまでの限られた時間でイタリア観光が出来ました。フィレンッウェとローマの街を見てまわりましたが，“ローマの休日”で有名になったスペイン広場や真実の口は日本人だけでなく外国人も非常に多くinternationalな観行名所のようです。その他バチカン市国のサン・ピエトロ寺院やかつての円形劇場のコロッセオなどactiveに観光でき，よい経験が出来たと思います。

～最後に～

私にとって初めての国際学会でしたがいろいろ不慣れな点があり緊張の連続でしたが，同時に貴重な体験をさせて頂けました。今後の臨床，研究に生かしていきたいと思います。この場を借りまして黒野教授をはじめ医局の先生方，秘書さん方に深く感謝いたします。

## The 1998 Seven Departments Joint Meeting of Otolaryngology

林　　多　聞

平成10年11月28日大分にて開催されました，７大学ミーティングについてご報告致します。参加大学は，鹿児島大学のほか主催の大分医科大，島根医科大，関西医科大，金沢医大，台湾大学，ヨンセイ大学でした。例年どおり exiting なたくさんの演題が発表され，活発な討論が繰り返されました。当科からは，西元先生の Clinical Evaluation of Taste Dysfunction after Treatments of Head and Neck Cancer，福岩先生の Application of Autologous Fiblin Glue for Ear Surgery，そして私の Stereotactic Gamma Radiosurgery for Head and Neck Cancer の三演題を発表しました。西元，福岩両先生は英会話も堪能であり質問に対しても余裕の応答でありましたが，私の場合は質問の意味は分かってもうまく返答ず，もどかしい思いをする羽目になりました。実は英語での発表に際し発表原稿の添削のみならず，ラ・サール高校の英会話教官に発音練習用にテープへの録音を依頼するという念の入れ様でしたが，質疑応答に対しては無力でした。しかし英語での学会ということもあり良い経験になったと思います。

さて私事ですが，大分へ出発する直前，鹿児島空港搭乗手続きがすんだ時点スライドを忘れていることに気付くというアクシデントに見舞われ，危うく発表に間に合わなくなるところでした。何とか最終便を手配でき，大分に着いたときは，０時30分でした。教授を始め皆さんに心配していただき，あきれられ，ついでに河豚を食い損ねる憂き目に会いました。ところが学会翌日のゴルフコンペでは近年にない好調で，ベスグロ，準優勝，ドラコンとたくさん賞品を頂き（折畳式自転車を含む）全体としてはとんとんかなと思っています。

何はともあれ大変勉強になる学会でありました。

## ４．関連病院便り

# 県立大島病院便り

出口　浩二・濵﨑喜與志

奄美大島に赴任して１年半が過ぎようとしています。ほとんどの季節を２度経験しますと，「去年と比べると今年は……」といった表現ができるようになってしまいます。

今年の冬は，やたらと「去年と比べると今年は寒いですね」を連発しているような気がします。その度に「そうですかあまり変わらないですよ」とか「毎年こんなものですよ」といった答えや「年取ったんじゃない」とか「お迎えが近いんじゃない」といったひとこと言い返したくなる答えが返ってきます。もちろん鹿児島本土にいる時とは違い薄着だし，家にこたつもありません。

奄美大島，特に名瀬市は風が強く実際の気温より体感温度は低く感じるのですが，それにしても去年とは違う感じがします。琉球大学出身，同期のＩ先生の「沖縄も最初の冬はあったかいけど，それから後はそれなりに寒いんだよね」と言った言葉が身にしみてわかります。暖かい冬の中で生活しているせいか，鹿児島に帰った時の鹿児島本土の寒さはまるで異次元の世界です。気温にして６～８度違うのですから無理もないのかもしれません。

地元の人はこの暖かい冬になれきっているせいか僕に比べかなり厚着になり，出不精になるようです。病院は８：30に診療開始なのですが，診療開始直後は人もまばらで10：00頃より混雑し，11：00頃がピークになるようです。（耳鼻科だけなのでしょうか？）

この原稿を書いている２月13日（原稿の締め切りはすっかり過ぎていますが…）の時点では，緋寒桜の盛りも過ぎ，春の足音が早くも聞こえています。

文責：濵﨑

# 川内済生会病院便り

島　哲也・杉原　純次

川内済生会病院は総病床数254床で平成８年５月に旧病院横にツインタワー方式５階建ての新病院が完成し約３年経過しています。診療科目は現在11科目職員数は常勤医師36名を含む300余名です。４月からは皮膚科も常勤となる予定です。川内市を中心とする半径50キロの範囲内には国公立の公的病院がなく以前より当医療圏の基幹病院となっています。平成11年度は全国の済生会学会ならびに総会（1500名出席）を川内病院が委嘱されており鹿児島市で開催予定です。川内に赴任してまず驚かされたのは春先と秋口に発生する濃霧でした。深夜から朝にかけて街をおおい視界３－４メートルの事もあります。現在川内では新幹線のための用地買収ならびに工事が始まっています。完成すると病院の約200メートル先を新幹線が走る事になりそうです。川内市では市内の小，中学校すべてで学校検診時にディスポの鼻鏡＋舌圧子，耳鏡を使用しています。川内市耳鼻科開業の先生方の尽力によるものです。特に鼻鏡の柄が舌圧子になっている診療器具は川内にきて初めて拝見致しましたが使いやすく診察も速いと好評です。川内には当番医制なるものがあり，当院は月に９日当番医を担当しています。当番日は耳鼻科医は自宅待期で病院にいる必要はないのですが，一次救急病院と化し夜間（日，祭日であれば昼も）急患が受診します。急性中耳炎，鼻出血，顔面外傷，急性上気道炎，咽頭異物（魚骨が多い），鼻腔異物などが主です。２月からは当番日の内科系の全館当直を月に１回耳鼻科で担当する事となり，内科にコンサルトする機会が多くなりそうです。病院内に医局はありますが，外来，病棟のある新病院ではなく旧病院にあり遠くてほとんど利用されていないのが現状で，耳鼻科では外来の検査室が医局がわりになっています。Drがほとんど新病院にいるため紙袋をもったスーツ姿のMRさんが外来をハイカイされDrを掴えようと虎視眈々とねらっています。Dr同志も顔をあわせる機会が少ないため各科Dr間の交流を図るため医局雑談会なるものを２－３ヵ月に１回開催しようとしているところです。最近病院内で変化があったのは10月22日より外来処方は全面院外処方で発行することとなり10月に53.4％だった院外処方率が12月には80.5％と急増した事です。耳鼻科外来では看護婦は常勤２名（勤労30年の二牟礼さん，ベテランの古川さん）です。新しく来られる先生は大変かわいがっていただけるものと思います。その他

非常勤１名（やさしい藤井さん）です。３名体制ですが，常勤，非常勤の休みの日は臨時の応援がきます。耳鼻科の外来診療は月－土の午前中（週休２日ではありません。）月，金の午後（再診のみ）であり，一日平均約50－70名です。通常疾患が主ですが時に悪性疾患が見つかる事，紹介される事もあります。手術日は火，木の午後で扁摘が最も多くその他デビコン，MLS，鼻茸摘出術，顎下腺摘出術，耳下腺摘出術，鼓室形成術等々行っています。これからも新しい診療，治療法を積極的に取り入れ頑張っていこうと思います。

文責：杉原

# 鹿児島市立病院便り

鹿島直子・花牟礼豊・笠野藤彦・相良ゆかり

私が市立病院へ赴任するようになって，まもなく１年が過ぎようとしています。今回，耳鼻科の関連病院に赴任するのは初めてで，研修医期間を終え，大学から出て，それなりの責任を負い患者さんと接さねばならないことに非常につよい不安を感じていました。鹿島先生，花牟礼先生，笠野先生の超ベテランの３人の先生方の力で，何とか乗り切ってこれたように思います。これまでいらっしゃった出口先生に変わり，こんな私が診療に加わるとは耳鼻科医＋１どころか－100ぐらいになってしまい，大変先生方には御迷惑をおかけし，申し訳なく思っている次第であります。

市立病院は患者さんの数が多く，症例数，種類ともに非常に豊富です。なかでも，悪性腫瘍の症例数は多く，かつ，珍しい症例にもしばしば出遭います。また，笠野先生が中心となって耳の手術を積極的に行っていらっしゃるため，耳の手術症例数がかなり増加しています。そのため，手術件数は平成10年４月～平成11年１月までに総数387症例（内訳は後述）となっております。

さて，市立病院の外来の風景ですが，朝８：30診療開始で９：00までは，まず外来患者さんの診療をします。９：00からは病棟の患者さんに外来に降りてきてもらい，診察をします。病棟患者さんの診察が終わると，とめどなく来る外来患者さんの診察が始まります。最初のうちは「果たして診察に終わりはくるのだろうか」と真っ青になりました。

市立病院の騒然とした外来風景は何年も前から変わらないと思いますが，以前と比べると鹿島先生曰く，「音がなくなったわ。」とのことです。それまでは松村先生，鹿島先生の声が大きいため，それに負けないように赴任してこられた先生方は叫ばなくてはならなかったそうです。そのため，ムンテラが廊下までもれ出るような，まさに「誰にでもわかりやすい」ものであったそうです。

現在では花牟礼先生，笠野先生，静かに診察を進められるため「あたしの声だけ響いていやになっちゃうわ。」と鹿島先生はおっしゃっています。

最後に毎日が失敗と反省の繰り返しで，先生方，スタッフの方々には御迷惑をおかけし，本当に申し訳ございません。

1998年４月１日～1999年１月

| | | |
|---|---|---|
| 耳手術 | 110症例 | （うち悪性腫瘍　25例） |
| 鼻・副鼻腔手術 | 65症例 | （うち悪性腫瘍　２例） |
| 口腔・咽頭手術 | 127症例 | （うち悪性腫瘍　27例） |
| 喉頭手術 | 33症例 | （うち悪性腫瘍　10例） |
| 唾液腺・頚部手術 | 50症例 | （うち悪性腫瘍　18例） |
| 顔面 | ２症例 | |

文責：相良

# 鹿児島生協病院便り

江川雅彦・土器屋富美子

現在，（平成11年１月末）インフルエンザの猛威にさらされている生協病院です。一日の総外来患者数は1300人を連日超え，日曜，祝日でも500人来院する有様です。98年度の当科を振り返ってみます。

ピアス外来は130人を突破するなど順調ですが，気になるのは備え付けの恐怖の「虹の意見箱」です。つまり外来処置，ムンテラ，患者さんへの対応における医師やスタッフへの患者からの苦情としての投書です。こういう御時世に加えて，やはり若い母親が多いため気を使います。加えて，お子ちゃま軍団の暴れっぷりはすさまじく，ほとんど「外来崩壊」状態です。よその数々の耳鼻科で子供が怒られて，もしくは母親がDrとケンカするか，治療に納得がいかないから来院したという「お子ちゃまドクターショッピング」症例もかなり多いのが特徴でしょう。

上記と相反して対照的なのが当院他科Dr達のまじめさ，おとなしさであり，この２年間昨日はどこそこに飲みに行ったとか，天文館の話などはただの一回も聞いたことがありません。病院の公式行事としての飲み会は卸本町にある「大安閣」一本やりです。そこでの食事といえば，かに蒲鉾とキュウリの酢の物，固形燃料鍋，エビフライかと思うような黄色い，分厚い衣のエビの天ぷら，最後はみそ汁，漬け物なしの御飯といった三流会席料理のお約束フルコースです。二次会でも天文館に言ったことは一回もありません。30年前と変わらず谷山地区の住民，病院職員は独立した「市」としてとらえているのでしょうか。しかし職員旅行は多彩なコース満載で，北海道（トマム）にスノーボードに行って来ました。

最近は鹿児島市南部，薩南地区からの紹介も増え，入院患者数，手術数もかなりの増加傾向にあります。加えて昨年度は黒野教授には20回近くお越しいただき，内容も充実したものとなりました。毎回の手術の度ごとの斬新なテクニック，工夫は目を見張るものがあり，教授の「引き出し」の多さには感嘆するばかりです。以下に簡単に示します。

耳　　34　その内，鼓室形成術は12例でTranscanalによるアプローチ，Dexson包

装紙による耳小骨・鼓膜の保護，Interdigit 法（採取した筋膜をツチ骨に襟巻き状に挿入），整外用ノミでの骨弁形成，側頭筋膜採取・保存・挿入時の方法，外耳道ガーゼ挿入時の小児用鼻鏡使用など工夫が多々あります。手術は４～５時間近くかかることもあり，待合室でずっと待っているMR の面々とは視線を合わせないようにして午後の外来へそのまま突入します（木曜午後は身障のため土器屋 Dr は不在）。

鼻　165　Stortz 社製内視鏡，ビデオ，モニターを大金はたいて（金額は御存知の方は御存知のことと思います。ちなみに手元で Zoom up，Focus が可能の最新式）御購入いただき，前頭洞，蝶形骨洞の手術も可能になりました。鼻内篩骨手術での鉗子の繊細な使い方と，前頭洞手術（ESS＋鼻外）でのノミのダイナミックな使い方の対比が印象に残りました。

咽頭　62　やはり扁摘が多いですが，最近は UPPP が増えてきました。ともに１回は教授の手術を見てみたいと思います。

その他　14　３歳男児の Blow out fracture（下眼瞼法にて）の他，耳下腺手術での皮切，Marking，顔面神経本幹へのアプローチ法などが既存の方法とは多少異なり，勉強になりました。

計　275　（平成10年２月から平成11年１月まで）

自分としては耳以外は甲状腺，耳下腺がもっと増えればと思います。従来の毎週火・木に加えて水曜日も手術日となったものの，全て外来と並行のため，一人は外来，もう一人は手術という体制を取っているのでなかなかクソ忙しいです。やむなく20～30分外来を空けることもあり患者からの苦情も時々あります。よく南中はあれだけ（当時は１～２時間はザラ）空けられるものだなと妙な感心をしてしまいました（今は改善されているでしょうが)。そのため土器屋 Dr は自前でピンクの術着（年甲斐もなく？）を購入し，その上に白衣をはおって奮闘していますが昨年は肺炎でまたダウンさせてしまいました。

最近は多くの後輩も結婚してしまい，今年はついに年賀状に「今年は結婚はまだですか？」のお添え書きがただの一通もないという情けない状況でした。まあ21世紀までにはなんとかなるでしょう。　文責：江川

# 県立北薩病院便り

林　　多聞

この原稿を書いている時点では，すでに大学病院勤務となっているのですが，激動の１年間を振り返りながら北薩病院だよりをお送りしたいと思います。

みなさんご存じのように私が北薩病院に赴任して半年間は村野先生との二人体制，後の半年間は私一人となりました。後期６カ月は手術件数も大幅に減ってしまいましたが，何とか外来患者数だけは維持することができたと思っています。一日平均受診者数は60から70人程度でしたので，診療時間を４分割し時間帯ごとで予約してもらうことで対応していきました。一週間の内，月曜と金曜はアレルギー外来という名目で午後も診療を行っており，火曜日，水曜日は検査日，木曜日が手術日で医局より応援をお願いしていました。10月当初は，なかなか思うようにことが運ばず患者の方々や看護婦さんにご迷惑をかけることもしばしばでしたが，野村院長を始め他科の先生方の御協力もあり何とか運営ができたように思います。県病院の統廃合が検討されているなか，北薩病院は医局をはじめとして病院全体の団結が素晴らしく，目に見えて収益も改善されてきていました。その一員として働けたことは良い経験であり，素晴らしい思い出です。しかし一年とはあっというまで，本年度より鹿大に戻ることとなり正直残念に思っているところです。近隣に耳鼻咽喉科が少なく，特に県病院であることが重圧でしたが，貴重な経験ができました。何年か後にまた赴任する機会があればと思っています。

# 藤元早鈴病院便り

福　島　泰　裕

私が藤元早鈴病院に赴任して，平成11年３月現在で２年になります。正確な外来患者数は把握しておりませんが，最近ではカルテが途切れることが稀になり，１時間を越える待ち時間（けっして診療が遅い為ではありません）も珍しくなくなりました。事務長も医療器械をすぐに買ってくれるようになり，赴任当初一本の軟性ファイバーを買ってもらうのに４ヶ月かかったことが嘘のようです。

さて，藤元早鈴病院における耳鼻咽喉科はといえば，昭和60年に開設されて以来今年で15年目となります。平成10年度には，以下のような医療器械の購入と修理により一気に「現代の耳鼻咽喉科」になりました。

鼻・副鼻腔用硬性内視鏡：

黒野先生のお口添えがあってStrikerの内視鏡を買っていただきました。手術日は週に半日だけですが現在二ヶ月先まで手術の予定がいっぱいです。とても２ヶ月は待てないという患者さんや学生・学童に対しては，手術日以外の昼休み時間に，外来にて局麻下手術を実施しております。

喉頭直達鏡：

近くの某国立病院耳鼻咽喉科に喉頭蓋嚢胞の患者さんを何人か手術目的で紹介したところ，全員が喉頭直達鏡検査による生検をうけて，「良性でした」との返書を持って帰ってきました。STORZの器械を買っていただき「喉頭蓋嚢胞摘出術」を実施しました。

オージオメーター・ティンパノメトリー：

寄る年波には勝てず，とうとう壊れてしまいましたので，代替えです。

食道直達鏡・気管支直達鏡：

倉庫に仕舞ってあり，おそらく未使用ですが，あちこちに錆が浮いて朽ち果てようとしていたものを見つけ出し，私が１週間かけてピカピカに磨きました。その甲斐もあって，下咽頭異物（魚骨）を取る機会に恵まれました。

手術用顕微鏡：

ながらく倉庫に眠っていた永島の顕微鏡（未使用15年もの）を発見しました。程

度としては極上ですが，今となっては時代遅れでMLS用として使っております。

## 「おそるべし。黒野式ESS」

勝手に私が名付けた「黒野式ESS」とは，黒野先生に教えていただいた究極・空前絶後の術式です。藤元早鈴病院でESSを始めるに当たって，黒野先生の手術の手本を示していただきましたが，術後処置もたいして必要とせず，およそ1ヶ月で副鼻腔炎がきれいに治癒してしまったのには驚きました。マクロライド少量持続投与の出現以上の画期的な代物で，私はそれまで患者さんに，「手術は治りやすくするためで，術後治療が大切です」と力説しておりましたが，「手術をすれば直ります」とコロリと宗旨替えをしたほどです。

「黒野式ESS」について説明いたしますと，Agger nasiを大きく鉗除することにより，篩骨洞前群・後群・蝶形骨洞まで容易に観察でき，上顎洞の自然孔も大きく拡大し，症例によっては後壁の一部が観察可能です。浮腫状の粘膜は限界粘膜を残して鉗除するため，術創の治癒も早く，上手にやれば副鼻腔炎を約1ヶ月で完全に治癒せしめることが可能です。

最近，慈恵医大でESSを行ったという（術後22日目）患者さんを診る機会がありましたが，黒野式に比べ（もっとも誰が手術をやったかにもよりますが……），Agger nasiの処理が悪く，浮腫状粘膜の廓清も不十分で，今後長期にわたる術後治療と再手術も予想されるといった様子でした。

「百聞は一見に如かず」という言葉もありますので，黒野先生に教えてもらうことが可能であればさっさと教えてもらい，そうでない方は術後の様子を見る機会を作る事をお勧めします。「鼻茸のある症例に対しては鼻茸切除を行うべき」と云う認識（良識？）がある方は，きっと副鼻腔炎治療に対する認識が変わります。私は，手術至上主義（慢性のものに限ってですが）に改宗いたしました。

# 国立南九州中央病院便り

小川　和昭・竪山　俊郎

南中にきて早くも１年が過ぎました。

いろいろな経験を積むことが出来，指導してくださった勝田先生，小川先生には感謝しております。以前書きましたが,，パイク通勤ゆえ死にそうになりながらも何とか南中の勤めを終えられそうです。４月には，さびしい気もしますが，杉原先生と交代の予定となりました。

さて，南中の耳鼻科のシステムも少々変わり，現時点では外来診察日は月・水・金。基本的には手術は毎日行っておりますが，火・木をメインの手術日としております。外来受付時間は，従来通り午前８：30～11：00です。

最近やっと再建を必要とする手術が少なくなり少し時間の余裕ができました。年末から年明けにかけて週２回くらいのペースでそういう症例があったので目が回りそうでした。趣味に割ける時間もでき，充実しています。

寒い冬が終わり，春の気配が立ち込めてきました。移動の季節でもあり，旅立ちの季節でもあります。自分の進む道をしっかり見据えて，前進したいと思います。

文責：竪山

# 県立鹿屋病院便り

岩下　睦郎・花田　武浩

県立鹿屋病院の１週間を簡単にご紹介いたします。

月曜日：朝７時起床，身仕度を済ませ７：40家を出ます。朝８時より病棟処置開始（月曜日と木曜日は手術日の為この時間に病棟処置を済ませます。）ユニット等は病棟にある為早出の看護婦さんと処置を行います。処置が終わったら外来に降り外来診療を行います。外来患者数は40～50人程度ですが，紹介患者が日に４，５件はあります。昼食を医局でとり（私は日替わり弁当を契約しておりますが最近はそろそろ飽きてきました。）午後１時手術開始です。ここは常勤の麻酔科 Dr が２人いるため並列で３～４件行います。赴任した当初はガウンもシーツもディスポでなく布製であった事にとまどいを覚えましたが今では違和感はありません。

火曜日：外来にいく前に，術後の患者の報告を聞き，患者の顔を見て外来へ降ります。火曜日は回診日の為採血のオーダー等はこの日に行います。午後２時から回診を始めます。入院患者は悪性疾患から通常疾患まで幅広く集まっており１年間とても勉強になりました。午後３時から超音波検査です。ここは甲状腺疾患が多く，毎週４～５例予定が組まれております。

水曜日：午前中，外来診療を行い午後２時から病棟処置を済ませ３時からのアレルギー外来に備えます。小，中学生を中心に減感作療法等を行っております。

木曜日：この日は外来は休診で朝９時から手術を行います。その為病棟処置は朝８時から始め手術に向かいます。術中迅速診をこの日は頼める為，悪性疾患，甲状腺疾患等はこの日に組むようにしております。

金曜日：午前外来診療，午後２時から病棟処置を行い ABR などの検査を行います。

土，日曜日：土，日は交代で午前９時から病棟処置を行っています。入院もある為，術後指示。ムンテラを土，日に済ませます。

鹿屋での１週間は，あれよあれよという間に過ざ去っていく感じです。

文責：岩下

# 出水市立病院便り

松永　信也・岩元　光明

平成９年の４月に赴任し，もうすぐ２年が経ちます。

昨年は水害や地震などあり，いろいろと大変でしたが今年は今のところ大きな災害もなく平穏な日々が続いています。

さて，出水市立病院耳鼻科は平成５年に開設されましたが，平成10年までの手術をまとめましたので，ここで紹介したいとおもいます。

頭頸部腫瘍の手術（152件）の内訳

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 鼻・副鼻腔腫瘍の手術 | ７件 | | | | |
| 舌腫瘍の手術 | 12件 | | | | |
| 唾液腺腫瘍の手術 | 23件（唾石を含む） | | | | |
| （うち耳下腺 | ６件 | 良性 | ５件 | 悪性 | １件 |
| 顎下腺 | 17件） | 良性 | 14件 | 悪性 | ３件 |
| 喉頭腫瘍の手術 | 33件（ＭＬＳを含む） | | | | |
| （うち喉頭全摘出 | ７件 | | | | |
| 喉頭部分切除 | ２件） | | | | |
| 甲状腺腫瘍の手術 | 30件 | 良性 | 16件 | 悪性 | 14件 |
| 頚部郭清術 | 21件 | | | | |
| 大胸筋皮弁術 | ６件 | | | | |
| その他 | 19件 | | | | |

非腫瘍性疾患の手術（404件）の内訳

| | |
|---|---|
| 中耳炎の手術 | |
| 鼓膜形成術 | 33件 |
| 鼓室形成術 | 37件 |
| 鼻中隔矯正術 | 15件 |
| 副鼻腔炎の手術 | 83件 |
| （うち内視鏡手術 | 52件） |
| 顔面骨の骨折整復 | 23件 |
| 扁桃摘出術 | 90件 |
| 喉頭ポリープの手術 | 33件 |
| その他 | 90件 |

出水といえばきつい当直で有名ですが，僕の場合，ＤＯＡ（dead on arrive）はまだ2件しかありません。親しい内科の先生（よく一緒に飲みに行く）によると，「なにーっ，そりゃー何かおかしい。」とのことですが，やはり日頃の行いのお陰でしょう。次に来られる先生方はおはらいをしてくることをお薦めします。ちなみに待機の時もあまり呼ばれることもないのですが，待機でない日の翌朝に病棟に行くと，事故で顔を怪我した人が入院していることがあります。（部長は呼ばれているようです。）

ここ2年で，出水の街もコンビニが4件でき，スーパーセンターニシムタ，ブラッセだいわなどが健ち，ちょっと変わりつつあります。相変わらず鶴はやって来ますが，ヒメヅルがいるかどうかは知りません。

最後に出水市立病院は，鹿大の先生方と熊大の先生方の混成病院ですが，アットホームでとても働きやすい病院です。この病院で働くことができて，とてもよかったと思います。

文責：岩元

# 大島郡医師会病院便り

岩　坪　哲　治

この原稿を書いている時は，すでに大学病院勤務となってますが奄美大島での4カ月半の大山先生のもとでの研修について書きたいと思います。

前任の大城先生，福岩先生に引き続き鹿大耳鼻科から3人目に派遣されたのが平成10年9月のことでした。まだまだ11月くらいまで暑く鹿児島との気候の差にびっくりしながら過ごしながらも血液，消化器，循環器，呼吸器を専門とされる内科の先生方に手取り足取り一から色々なことを教えていただき充実した日々を過ごさせて頂きました。また，内科の研修だけではなく大山先生の診察を手伝わせて頂きかなりの緊張感を味わうこともできました。また，徳之島や喜界島への診療に行く機会を与えていただきましたが私のような者が行く場合でもたくさんの患者さんが受診され医師過剰時代といえどもまだ医者の足りない場所は多そうだと思うところでした。今思うとあっという間の4カ月半でしたが，私にとっては内科研修といった意味はもちろんですが良い経験であったと思います。この経験をこれからの研修の糧としていきたいと思います。

# XII. 関 連 病 院（平成11年４月現在）

| 病　院　名 | 郵便番号 | 住所（TEL・FAX） | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|---|---|---|---|---|
| 国立南九州中央病院 | 892-0853 | 鹿児島市城山町８－１<br>TEL:099-223-1151<br>FAX:099-226-9246 | 月・水・金<br>(8:30～11:30) | 月～金 |
| 国立療養所星塚敬愛園 | 893-0041 | 鹿屋市星塚町４２０４<br>TEL:0994-49-2500<br>FAX:0994-49-2542 | 木・金<br>(8:30～17:00) | |
| 県立大島病院 | 894-0015 | 名瀬市真名津町18－１<br>TEL:0997-52-3611<br>FAX:0997-53-9017 | 月～金<br>(8:30～10:00) | 火･木･金 |
| 県立北薩病院 | 895-2526 | 大口市宮人５０２－４<br>TEL:0995-22-8511<br>FAX:0995-22-6783 | 月～金<br>(8:30～11:00) | 水・木 |
| 県立鹿屋病院 | 893-0011 | 鹿屋市打馬１－５－10<br>TEL:0994-42-5101<br>FAX:0994-44-3944 | 月･火･水･金<br>(8:30～10:30) | 月の午後<br>木 |
| 鹿児島市立病院 | 892-8580 | 鹿児島市加治屋町20-17<br>TEL:099-224-2101<br>FAX:099-223-3190 | 新患 月･水･金<br>再診 火・木<br>(8:30～11:00) | 月･水･金 |
| 出水市立病院 | 899-0131 | 出水市明神町520<br>TEL:0996-67-1611<br>FAX:0996-67-1661 | 月～金<br>(8:30～11:00)<br>木のみ（再診）<br>(14:00～16:00) | 火･水･金 |

| 病　院　名 | 郵便番号 | 住所（TEL・FAX） | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|---|---|---|---|---|
| 済生会川内病院 | 895-0074 | 川内市原田町327－1<br>TEL:0996-23-5221<br>FAX:0996-23-9797 | 月～土<br>(8:00～11:00)<br>月・金のみ(再診)<br>(14:00～16:30)<br>水の午後<br>第1・第3 特殊検査<br>第2・第4 補聴器外来<br>(14:00～16:30) | 火・木の午後 |
| かごしま生協病院 | 891-0144 | 鹿児島市下福元町83-4<br>TEL:099-267-1455<br>FAX:099-260-4783 | 月・火・木・金<br>(8:30～17:30)<br>水・土<br>(8:30～12:30)<br>(新患は30分前まで) | 火・水・木<br>の午前 |
| 今村病院分院 | 890-0064 | 鹿児島市鴨池新町11-23<br>TEL:099-251-2221<br>FAX:099-250-6181 | 月・水・木・金<br>(8:30～17:10)<br>土<br>(8:30～11:30) | |
| 藤元早鈴病院 | 885-0055 | 都城市早鈴町17－1<br>TEL:0986-25-1212<br>FAX:0986-25-8941 | 月・水・・木・金<br>(9:00～17:00)<br>火<br>(9:00～11:00) | 火の午後 |
| 市比野記念病院 | 895-1203 | 薩摩郡樋脇町市比野3079<br>TEL:0996-38-1200<br>FAX:0996-38-0715 | 火・木<br>(14:00～18:00)<br>土<br>(9:00～18:00) | |

| 病　院　名 | 郵便番号 | 住所（TEL・FAX） | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|---|---|---|---|---|
| 天辰病院 | 891-0175 | 鹿児島市桜ケ丘4-1-8<br>TEL:099-265-3151<br>FAX:099-265-2560 | 月・水・金<br>(9:00～18:00)<br>火<br>(14:00～18:00)<br>土<br>(9:00～13:00) | 火の午前 |
| 垂水中央病院 | 891-2124 | 垂水市錦江町１－140<br>TEL:0994-32-5211<br>FAX:0994-32-5722 | 火・木<br>(13:30～16:00)<br>土<br>(8:30～11:30) | |
| 加治木温泉病院 | 899-5241 | 姶良郡加治木町木田字松原添4714<br>TEL:0995-62-0001<br>FAX:0995-62-3778 | 月・火・木<br>(13:30～16:30)<br>土<br>(8:30～11:30) | |
| 田上病院 | 891-3198 | 西之表市西之表7463<br>TEL:09972-2-0960<br>FAX:09972-2-1313 | 火<br>(9:00～17:30)<br>水<br>夏(14:00～17:00)<br>冬(14:00～16:20) | |
| 阿久根市民病院 | 899-1611 | 阿久根市赤瀬川4513<br>TEL:0996-73-1331<br>FAX:0996-73-3708 | 火・金<br>(8:30～15:30) | |

| 病　院　名 | 郵便番号 | 住所（TEL・FAX） | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|---|---|---|---|---|
| 鮫島病院 | 891-0406 | 指宿市湯の浜1-11-29<br>TEL:0993-22-3079<br>FAX:0993-22-3019 | 火・木<br>(8:30～17:30)<br>水(13:30～17:30)<br>土(8:30～12:00) | |
| 大島郡医師会病院 | 894-0046 | 名瀬市小宿3411<br>TEL:0997-54-8111<br>FAX:0997-54-8870 | 火・木<br>(8:30～11:00)<br>(13:00～16:00) | |
| 栗生診療所 | 891-4409 | 熊毛郡屋久町栗生1743<br>TEL:09974-8-2103<br>FAX:09974-8-2751 | 第１・第３<br>金(8:00～16:00)<br>土(8:00～10:00) | |